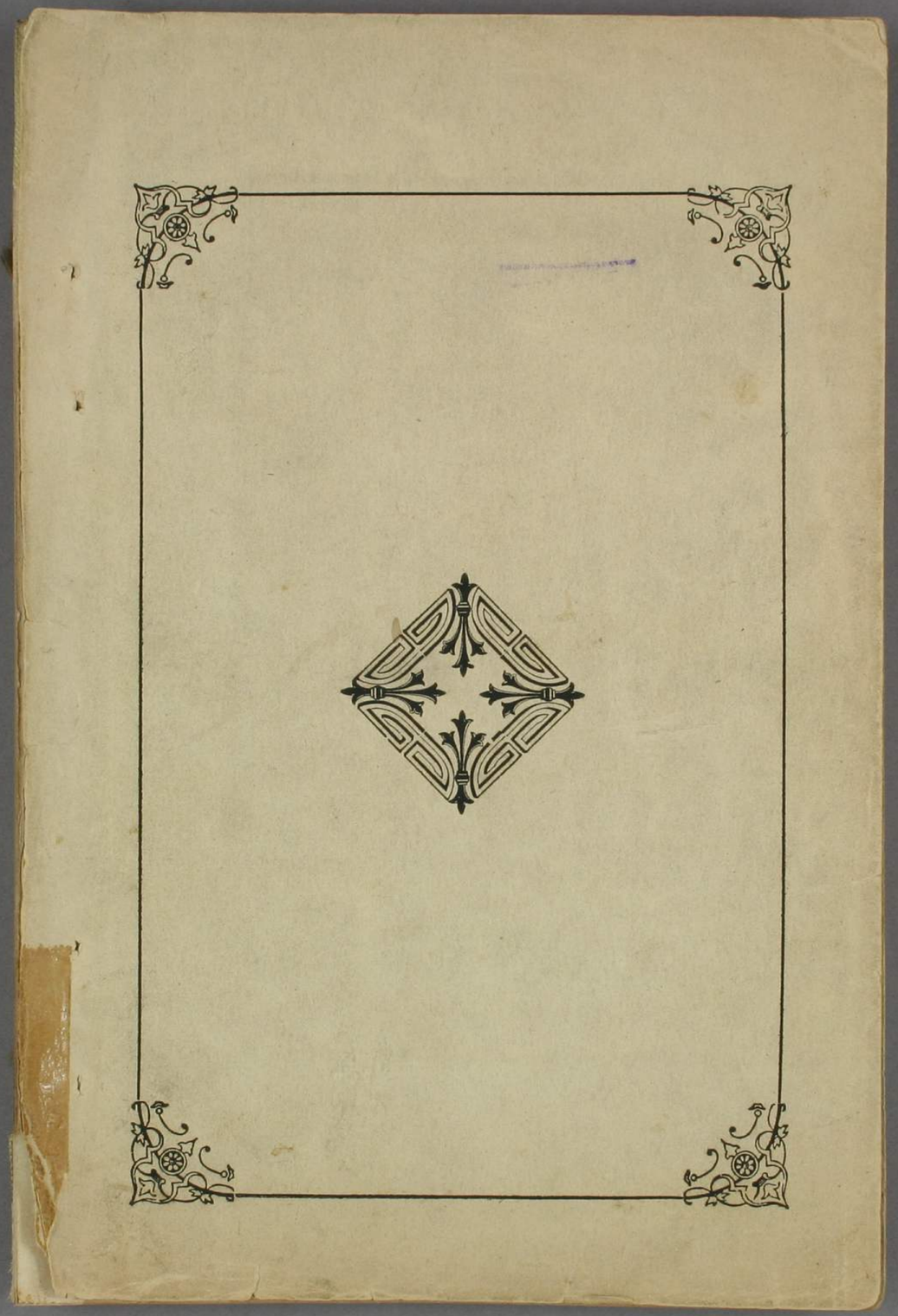
新撰長歌集



ISSEIDO
東京 神田 誠文堂

岸本宗道 編
大宮宗司

新撰長歌集

菊園舍藏版

岸本宗道
大宮宗司編

新撰長歌集

菊園舍藏版

むかしのものゝふの、鎗といふつはものもて、そのわさをあらそひしに、あるは、長きをよしといひ、あるは、短きをまされりとして、おのゝいとみしこともありときく。今の角力人の中には、すくれて身のたけの大きふるもあり、また、さはかりふらぬもあるを、力くらへするを見れは、その勝負は、身のたけの大き小きをもてのみは、いふへくもあらす。そもゝゝ、長きはみしかきにまさり、小きは大きふるに志かさる、理のつねふれと、その長きをも、ふかしとせさるはかりの力あり、大きふるも、その大きさにかふふはかりのわさを具してこそ、まことにすくれたるかひはあるへけれ。いたつらに、長く

大きふるのみにては、ふか〳〵、短くちひさきかまさるよし
そあるへき。歌の長きとみしかきとも、なほ、おなしことにし
て、ひとむきには、あけつらひかたからむ。近き世、長歌よむ人
のすくふく、たまさかによめるあるを見るにも、こゝろゆき
ておほゆるかまれにして、短きには遙におとりさまなるは、
たゝ、みしかきにのみふれて、長きにはうときと、長きを吾も
のとすはかりの力の、いまたみち足はさるとによるふるへ
し。されと、今の世の人にして、長歌は、つひによみうることか
たしと定めて、意にもとめす、また、歌はみしかきにかきりて、
長きは用ふきものゝことくいひて、かへりみせさるは、いま

た、その道にくはしからす。はた、世にいはゆる、勉強進取の氣
にともしきあさけりをのかれさるへくやあらむ。今、この長
歌集のはしに、一言をとこはるゝまゝに、かねておもへるす
ちのかたはしを、世の歌よみたちにとひかたらひてら、い
さゝかいつけて、はし詞の代とす。

明治二十五年の夏

日は長くしてあつきを、いたつらにうみくらし、
夜はみしかくてねふたけなるを、かこちつゝ

本居豐穎

志るす

新撰長歌集

緒言

韻文は、散文にさきたちて、社會創始のときより、はやくおこりたる、文學の最も重ずべきものふりなり。その韻文中、長歌は、短歌に優れて、いと靈妙ふるものふるをもて、その振ふと振はざるとによりて、大に、文學に影響するふりなり。さるを、近來、中古時代の文學は、よく盛におこなはれて、その出版も、また、おほしといへども、いまだ、我國文學の純粹精美ふる、長歌の書のいでざるは、以て、その盛ならざるを知るべし。かくては、我國文學のため、かふしむべきふりなり。今にして、こをすくはざれば、いかでか、誠實ふる文學者とはいふべけむ。この責任にあたるもの、われ〻〻ふらずして、誰かあらむ。こゝに、現今の大家

といはるゝ歌人の、最も、勝れたる長歌をえらびあつめ、新撰長歌集と名けて、世人に示すことにはふしぬ。

長歌は、詠むその人によりては、かぎりふく長きものをも詠み得べく、また、歌ひ得べし。されど、我國の歌によるに、長しとて、必ず、よしとにはあらず。短しとて、必ず、あしとのみにはあらざるふり。かの歌聖の絶佳ふるものは、短きにもあり、長きにもありて、一様ふらざるふり。さるを、西洋の歌には、短きものには、よきものたえてふく。めでたきものは、必ず、長きものにあり。即ち、ダンテの神聖戯曲は、一百段、ミルトンの失樂園の詩は、十二巻。かゝる長篇ふるものは、東洋にはふきところなり。唐の白樂天の長恨歌は、詩の最も長篇にして、去かも、世界の歌にくらぶれば、いさゝけきものふり。これ、東洋と西洋

との歌の、異ふるのみふらず、その感情に、大に徑庭あるものふり。唐詩は暫くおき、我國の長歌には、何をもて、かゝる大篇ふきか。大作あらざるか。われ〳〵は、こゝに、一言しおかざるべからず。抑、我國の長歌は、實狀眞景をのみ寫しいでたるものにして、その想像を構へて、奇思妙想を奔らしたるものとては、たえてふし。そのうるはしく、めでたきものとては、その詞、その綾のめでたきものにして、かの西洋の歌のごとく、裏象上の活動、總合上の活動ふきものふり。我國の歌聖としいはれて、世にたふとばれたるものは、たゞ、單一の感情強かりしのみにて、かの西洋の、くさ〳〵の物によそへたるごとき、智見ふかりしによるふり。もし、古人にして、西洋の歌人のごとく、裏象上、總合上の智見ありたりとせむには、我國文學の

世界にかゞやきたりしこと、うたがふべからず。されば、今の長歌をみ、長歌をよまむとするものは、よろしく世界を見めぐり、衷象上、總合上の智識をえて、さて後に、我國文學をして、世界の華とし、句はせむことをおもひはかるべし。

今様は、長歌にたぐふ文學なるをもて、こを巻末につくることゝはふしぬ。今様の最もふるく、いまだ、その體定らざりしころのものは、悉く、省きて載せず。その四句の調にふりたるものゝみを、その最もふるきものより、現今名家の作にかゝりたるものまで、漏さずいれたり。

明治二十五年七月の日いとあつき窓にて

汗かきぬぐひつゝ

岸本宗道

大宮宗司

長歌の變遷

凡そ、生物の間には、人より貴きものふく、その貴き人の身には、心より貴きものはあらじ。されども、その心には、色香形影ふどのあらざれば、目に見、手に執ること能はず。唯、耳によりて、物の音を聞くことを得るのみ。物合はざれば、必ず音すとか、唐人の言にも見えたり。木は風にゆるぎて鳴り、巖は浪にふれて響く。哀を哀ともせず、喜を喜ともせずは、いかでか、人情を述べうべき。悲むときは、その情雨と降り、怒れるときは、その氣空をもつかむ。これ、物に觸れ、事に障りて、必ず、いづべき至情ふり。春の鳥のさへづるを聞きては、我身も共にとおもひ、秋の虫の鳴くを聞きては、年月の暮れゆくをはかふむ。身の上のこと、世の中のこと、おもひにつけて、色香形影なき

心に、そこはかとなくうかべらむは、やがて歌ふり。かく、喜怒哀樂より、男女の想戀、親子兄弟の愛憐にいたるまで、あらゆる感情を出すをもて、力をも入れ。ずして、天地をうごかし、目に見えぬ鬼神をも、あはれと思はしむるにいたる。歌の德も、また、偉ふりといふべし。そもゝゝ、人の始めて天地に出づるや、目をひらけば、山川草木の美色を見、耳を欹てば、禽獸蟲類の美音を聞く。見るもの聞くもの悉皆天眞の爛熳を盡さゞるはふし。この時におきて、人間の感情、果していかふりしか。花に鳴く鶯、水にすむ蛙の聲を聞けは、生としいけるもの、いづれか歌をよまざりける。心にうつるもの、かく、天性自然を得れば、その感情、一として、天性自然を穿たぬはなし。かゝりし世の人は、つばらかに、物を識別する智慮もふく、また、僅

に事を企圖せむとする意思もふく、唯、飲食鐵芽を支ふれば あけりとし、衣服飢寒を防げは足れりとせしかども、天性に感じ、自然に動くは、實に、不可思議千萬ふるものふり。かくて、その感動志たる言詞には、一々律調を備へて、その怒れるときは、急雨のそゝぐがごとく、その和めるときは、皎雪の朝日に匂へるが如くふりしふり。されば、その歌は、おのづから天工をきはめ、能く律調にかなひ、亂慢せることくにして、志かも嚴格ふりしふり。さて、我國の歌は、今より幾千年前に出でたりしか、知るべからずといへども、何處の國にても、人類の蕃殖すると同時に、その思想を述ぶべきもの、必ず出でたれば、我國にても、猶、神代におきて、はやく、素盞嗚尊の三十一文字の歌ありしふり。されども、その體、後世の短歌とは、大に異

ふるものなり。これより時過ぎて、漸く、感情廣大にふるまゝに、三十一文字にては、述べ盡しがたくふりて、遂に、長歌をもちて、感情をあらはすにいたれり。これ、長歌の起原ふり。されども、この時代の短歌は、その句格上より論ずれば、毫も長歌に異ふることふきものなり。されば、三十一文字の感情廣大にふりくるにつれて、おのづから、長歌をよみいでたりしを知るべきふり。さて、長歌の最も早く見えたるは、下照姫の歌、八千矛神の歌などなり。その天眞爛熳にして、跼天蹐地の憂ふく、千變萬化ふる、以て見るべきふり。そもゝゝ長歌は、文學中、最も、綾趣の巧妙ふるものにして、その脩飾の雅藻ふることと、短歌文章の及ぶところにあらざるなり。且、古と今とを論ぜず、思想感情を述ぶるにも容易くして、短歌のごとく津涯

あることふし。故に、もし、長歌にして盛に行はれむか、その効益、獨、長歌のみならず。文章をも進捗せしめ、我國の文學をして、益、高尚ふる地位に達せしむることをえむ。八千矛神の歌、下照姫の歌、すべて、上代の歌は、所謂、天眞爛熳にして、一點のさすべきところふし。そのさまは、和くも、堅くも、強くもありて、四季の立ちかへりつゝ、前後論定ふがたし。されども、後世に至るに及びては、思想感情の發達と共に、おのづから、その體を易へて、仁德允恭の際より、やゝ移りそめて、舒明の朝にいたりては、いよゝゝ移りて、そのさまは、み冬つき春さりきて、雪氷の融けゆくが如くふれり。天智帝以前の歌は、直におもひを述ぶるのみふれば、その風體、いと、質朴ふれども、持統の朝とふりては、大に、文學の思想を挾みて詠みいでたるを

もて、文辭高遠雄渾、粲然としてかゞやき、その盛を極めぬ、柿本人麻呂、山部赤人ふどの歌聖も、この時にいでたり。そのさまは、大海原に景色ある島どもの浮び出でたらむがごとく、おもしろき威勢いでたり。元明の朝のはじめに至りては、前の威勢ある歌に倣ひて、よみ出でたるをもて、何とふく、その意狹くふりて、そのさま、やゝ衰へかゝれり。奈良の朝の中頃に至りては、ますゝ衰へて、あかしき隈もふき海山を、風の疾き日に見たらむがごとく、荒びたる姿となれり。この頃は、山上憶良、大伴家持などの歌人いでたり。かくて、平安遷都の後は、詩賦盛におこり、特に、嵯峨天皇に至りては、いたく詩賦を好み給ひければ、朝臣、皆これに靡きて、歌道いたく衰へたり。さては、歌を詠むもの、たゞ、三十一文字のみもてあそびて、

長歌を詠まむとするものとてはふく、萬葉の古風、全く地を掃ふにいたれり。そは、仁明天皇四十の御賀の時、興福寺の僧徒の長歌を奉りたる詞に、夫倭歌之體比興爲先、感動人情最在玆矣、季世陵遲斯道已墜、今至僧中頗存古語、可謂禮失則失、則求之於野、故採而載之、とこの頃は、かの有名なる僧正遍昭、在原業平ふどのありし時ふり。さるを一法師輩にすら、かゝる嘆言をおこさしめたるは、以て、長歌の廢れたるを知るべきふり。

さて、古今集に入りては、再び大變を起したり。貞觀のころ、世に六歌仙ふど稱へられたる人々出でゝ、漢文に抑壓せられたる文學をおこしたり。その主唱家ともいふへきは、紀貫之をはじめ、凡河内躬恒、伊勢、壬生忠岑ふどふり。これらの人々

は、皆、長歌を詠みたれども、その體一種異樣ふれば、古來の長歌とは、同視するをえざるふりぃそのさまは、かの荒びたる反對になりて、清らふる庭に、山吹の咲き撓めらむがごとく、ひたぶる妹に似たるすがたとふれり。これより後の歌集、日記ふどに散見する歌は、猶、同體にして、純粹の古格はほとゝゝなし。かくて、徳川氏の前までは、依然としてすたれたりしふり。されども、この間のかく衰微たるは、漢文の盛ふるにあらず。文學の盛ふらざるにあらざれども、當時、文學の思想一變して、短歌時を得たりしかば、遂に、目を長歌にそゝぐものふかりしふり。

徳川氏のはゞめに至りて、僧契沖、荷田東麻呂の二人いでゝ、古書を攻究して、歌學の復興をはかれり。この時に、また、下河

邊長流ありて、古學をふし、香川景樹ありて、歌に一派を立て、おのゝゝ長歌をよみたり。これより賀茂真淵出て、大に、古學の振興せざるべからざるを説き、熱心に長歌を詠めり、その體、萬葉にちかし。その門人に、本居宣長、橘千蔭、村田春海、荒木田久老ふど、皆、真淵の教をうけて、長歌を詠みたれば、大に發明するところもありて、萬葉集の歌に比ふべきもの、續々出でたり。これより、橘守部、加納諸平、石川依平、飯田年平ふど、いづれも盛に長歌を詠みたりき。殊に、守部は、大に、長歌の體を論じたれば、遠近、その門に集るものおほかりしといふ。

長歌の格例

凡そ、脩飾のめでたきものは、文學の最もたふとぶところに

して、この脩飾のめでたからざるものは、文學の價値はなきものゝふり。かゝれば、脩飾のめでたからざる歌は、その價値あらざるをもて、殆と讀むべからず。上古の歌は、飾るころありて、飾りたるにあらざれども、おのづから飾らしむべきものありて、かざりたるふり。かの歌聖といはるゝ人麻呂、赤人ふど、皆さふらざるはなし。されども、吾々は、そを詠みて、心に志みゝ、そを見て、心のふるひおこるものあるは、その歌に、えもいはれぬ脩飾のあればふり。いきほひのあればふり。かくて、脩飾の風格を古歌にとるに、くさ〻あり。今、その格例を左に志めさむに、

第一正疊句の例

賢女(さかしめ)を、ありときかして、美女(くはしめ)を、ありときこして。

本へには、いくみ竹おひ、末へには、たしみ竹おひ。

第二變疊句の例

神ふがら、神さびせすと、よしの川、瀧つかふちに。

高殿を、たゝむ志りまして。

そたゝき、拊(たゝ)きまふかり、ま玉手、玉手さしまき。

第三正對句の例

行水の、かへらぬごとく、吹風の、目に見ぬごとく。

青ふみに、のぞみは絶えぬ、志ら雲に、涙はつきぬ。

第四變對句の例

秋山の、志たべるいも、なよたけのとをよる子ら。

八十隈おちず、萬たび、かへりみすれば。

石の上、ふるをすぎて、こもまくら、たかはし過ぎ、物さはに、

おほやけ過ぎ。

第五隔疊句の例

夕には、消ゆといへ、夕に立ちて、朝には、うすといへ。
前妻(こなみ)か、ふこはさば、たちそばの、實のなけくを、
こきしひゐね、後妻(うはなり)か、ふこはさば、いちさかき、
實のおほけくを、こきたひゐね。

第六隔對句の例

里はしも、さはにあれども、山ふみの、よろしき國と。
ふたきの宮は、河ちかみ、瀬の音ぞきよき。
隱りくの、泊瀬の山は、いてたつ、よろしき山と。

第七聯疊句の例

あやがきの、ふはやが下に、むしぶすま、にこやが下に、

たくぶすま、さやぐが下に。
上枝(ほつえ)に、もちひきかけ、中つえに、いかるがかけ、下枝(しつえ)に、
ぢめをかけ。

以上の外に、招應、喚響、首尾、調段、譬喩、序辭などの格もあれど
も、そは、今いふべき必要ふければ、こゝにはすべてもらしぬ。
歌學者、よろしく、かくのごとき標準によりて、つくりもし、よ
みもすべし。

新撰長歌集

岸本宗道
大宮宗司　編

○春

都鄙迎新年

故日下田足穂

あらたまの。月來經行けば。あらたまの。新年かへる。
大御かど。朝けに見れば。うまひとの。御車つどひ。
宮　人　の。御馬集ひて。まゐのぼり。ことほぎすらし。
けふといへば。賤の身我も。忘らえて。言舉げすらく。
やすみたし。吾　大　君　の。大御代は。千代萬代と。
おしふべて。言ひ繼ぐ聞けば。新　年　の。よごとはおふじ。

内日刺す。都大路も。ひふの長路も。

反歌

天さかる鄙にも立てる新年をみやこにのみとおもひつるかも。

新年言志　落合直亮

あらたまの。年立ちかへり。朝日かげ。さしものどかに。
曇りふき。世にこそあへれ。津の國の。難波おもはず。
難波びの。よしとさだめて。立つ霞。山にかきわけ。
咲く花の。にほひをかすめ。崩ゆる草。野にふみわけて。
鳴く鳥の。聲に聞きつゝ。この春は。こゝろのどかに。
あかしくらさむ。

杉田の梅見にゆきて　故日下田足穂

冬ごもり。春さり來れば。櫻咲く。山はおほけど。
花の咲く。野はさはふれど。東路の。杉田の里は。
梅の花。今眞盛りと。聞くからに。わが見にくれば。
千本の梅。五百本の梅。目もあやに。咲きみちにけり。
その梅の。木の本ごとに。さかみづき。まどゐをしつゝ。
かぐはしと。ひとりのいへば。めでたしと。ひとりのいひて。
はてはては。手とりかはして。舞ひ歌ひ。遊びとよもし。
その花を。散らずもありへ。その枝を。手をりもありけり。
千本の梅。五百本の梅の。木のもとに。うかれあされる。
をの子らは。みやび男ふれや。たはれ男ふれや。

嵐山の花見にもきてよめる　故日下田足穂

嵐　山。高嶺の櫻。大井河。みぎはのさくら。
目もあやに。花咲くころぼ。うちひさす。都をと女も。
天さかる。鄙の荒男も。花見むと。行くをし見れば。
ものゝふは。武士ごち。たをやめは。手弱女ごち。
長き袖。短き袂。花の香に。そまぬやはある。
一筋の。橋も去りあへず。二方の。岸もにぎぴて。
さかみづき。聲うちあげて。やまと歌。から歌うたひ。
めであへる。人のゐらぎは。その山の。瀧にひゞかひ。
その河の。波にあらそふ。たゝずまひ。見つゝおもへば。
咲く花も。咲くかひあれや。見る人も。見るかひあれや。
嵐　山。高嶺のさくら。大井河。みぎはのさくら。

あかずもあるかも。

芳野山にもきけるとき花の散るを見てよめる　故日下田足穂

芳野の。見兼の嶽に。時ふくも。風吹くごとに。
隙ふくも。雨降るごとに。櫻ばふ。散りぞみだるゝ。
をしとおもふ。おのがこゝろも。その風の。時ふきがごと。
その雨の。隙ふきがごと。芳野山。櫻とともに。
散りぞ亂るゝ。

春興　故日下田足穂

菅の根の。長き春日に。うらうらと。霞みわたれる。

岡の邊に。うち出て見れば。梅が枝に。鶯鳴きぬ。
うぐひすの。聲もかぐはし。梅が枝の。匂ひもあかず。
そこゐるに。折りて歸れば。うぐひすや。送り來にけむ。
梅が香や。慕ひ來にけむ。庭のおもに。鶯音鳴く。
小簾のうちに。梅が香かをり。その梅を。小瓶にさして。
その聲を。聞きつゝをれば。菅の根の。長き春日も。
短くおもほゆ。

越後國小山田の花見にゆきてよめる　故日下田足穂

遠とほし。越の國ふる。蒲原の。小山田山の。
峰見れば。高くたふとし。野邊見れば。清くまひろし。

その峰に。雲立ちふびき。その野邊に。雪降りにけり。
白雲と。見えしも櫻。白雪と。見えしも櫻。
目もあやに。見れど飽ぬかも。天の下。山はおほけど。
八洲國。野邊はあれども。この山の。櫻にまさり。
この野邊の。花にまさりて。まぐはしき。野山あらめや。
そこもへば。あやにたふとし。神山と。いや高からし。
くしび野と。いや廣からし。小山田の。野山のさくら。
見れど飽かぬかも。

反歌

小田山の野山うづめて雲と見え雪ともまがふ花さかりかも

吉野にゆくとて小倉嶺に登りて霞をよめる

春の日に。こゝろはのりて。　故村山守雄

志づはたの。たづなかひくり。黒駒に。志づくらおきて。

おしてるや。難波をたちて。あをやぎの。鞭とり志でゝ。

白雲の。立田の山を。うちふびく。草香をすぎて。

みぎひだり。ふりさけみつゝ。百傳ふ。生駒の山を。

わぎもこが。家はそこゝも。くらがりの。嶺にのぼれば。

かすみこめけり。志らまゆみ。春はふかくも。

月前柳

うちなびく。やふぎのいとは。　故僧辨玉

いづる日の。たゞさすあした。おくつゆを。玉とあざむき。

暮るゝ日の。かぎらふゆふべ。

赤玉と。ほつえにつらね。白玉と。志づ枝にぬきて。

みづたまの。ま玉のおやと。ふかつ枝に。月をかすめて。

夜はかけゝり。

若菜つむをとめを見てよめる　日下田足穂

あづさゆみ。春の野にいでゝ。すゞふつみ。すゞしろつむと。

朝露に。袂はひづち。夕露に。裳裾やぬらす。

腰ぼその。すがるをとめ。むなたかの。くはしたをやめ。

たがために。わかふつむらむ。ちゝのみの。父のみこと。

はゝそはの。母のみこゝの。みよはひを。いほとせまでと。

千代までと。いはひつむらむ。すゞふすゞしろ。

反歌

父母のあすの御物とあとつかぬきよき雪間のわかなつむらむ

詠名所霞歌并短歌　　鈴木重嶺

すみのえの。あらゝまつばら。まつばらに。見えけるやかて。
ふきわたる。風もおとせず。うちよする。浪もおとせず。
うらうらと。かすみたちこめ。のどかふる。きはみとふりぬ。
繪にかくと。筆もおよばじ。言のはに。いひもつくせじ。
玉くしげ。ふたゝびかゝる。時にあはめやも。

反歌

我ひとり見むはあたらしすみのえやかすみたふびくあらゝ松原。

春日登芳野山作歌并反歌　　本居豐穎

みよしのゝ。よしのゝやまは。よきひとの。よしと見し山。
花ぐはし。さくらのめでは。ことめでに。まされるめで。
さくやひめ。神のみことの。たろたへの。あやのみけしと。
てるたへの。うづのみけしと。このやまの。峰のことごと。
さきをゝる。花しくはしも。咲きみてる。花しともしも。
のぼりたち。みらくたぬしみ。ゆきかへり。みつゝおもへば。
ときふく。ふるとふ雪も。このはふの。ちりのまがひぞ。
ひまふく。ふるとふ雨も。このはふの。たづえのつゆぞ。
うべふうべな。よしとふこの山。山ふところの。
ふせいほの。あさかりしころ。またばかる。白雲がうへに。
今ぞたらへる。あまぐもの。

反歌

さくらばゐ見つゝしをれば白雲のうつりゆく世のものおもひもふし。
花ぐはしき雲ゐのさくらはゐさくらひとにもがもふむかしかたらむ。

花盛　　飯田武郷

風さむみ。空さへさえて。ゆく水も。ぬるみかぬれば。
隅田川。つゝみのさくら。つねよりも。おそきとしぞと。
うちたゆみ。こもれるときに。ときふらぬ。雨のうるひに。
おもほえぬ。そのかみとげに。にはかにも。花ときたりと。
たまぼこの。道ゆく人の。かたりつゝ。すぐるはきけど。
まことゝも。いまだおもはず。そらごとゝ。おもふものから。
ゐかすかに。もだもあらねば。杖ひきて。あくがれいでゝ。
つゝみぢを。はるかにみれば。雪こそは。こずゑをうづめ。

雲こそは。きしにおりぬれ。あやしさに。うちおどろきて。
いそぎつゝ。車はしらせ。本のもとに。たづねいたれば。
ゐらゆきと。みしはことわり。ゐらくもと。見えしはまこと。
さきいでぬ。こずゑもあらず。ちりそめし。枝もふくして。
おしなべて。花こそさかり。今日みずは。くやしからまし。
うれしくも。よけくはきつと。うちつけに。こゝろおちぬて。
かげにいこひつ。

觀墨堤櫻花有感作歌　　小杉榲邨

ゐらくもと。ちりしむかしも。ゐらゆきと。ふりゆくいまも。
この川の。たえせぬがごと。さくら花。かをりもあせず。
さゞらふみ。さわぐ色ふく。はるばると。さかりふりけり。

あづまてる。神の御ひこの。まへつぎみ。うゑそめしとふ。
いにしへの。春をおもへば。うみの子の。家のさかりを。
さくはなの。あかぬにほひに。ちぎりこめけむ。

反歌

ふるされぬ花にむかしをとへばやなすみたの水のふかれこし世も。

獨看花歌　飯田武郷

花みつゝ。酒はのむとも。さけのみて。花はみるとも。
かたるべき。友しなければ。うちつけに。さびしからまし。
よしやその。友はありとも。おもふこと。こゝろあはせて。
かたらずば。たのしからめや。友ふきに。あにまさらめや。
すみだ川。つゝみのさくら。きにほふ。花のさかりと。

みふひとの。かたるをきゝて。さそふべき。友はあれども。
われはけふ。ひとりぞきたる。花の木かげに。

反歌

ひとしかる人しふければたゞひとりこゝろあはせてはふなをみるかふ。

名所花　小杉榲邨

いにしへを。志のぶの岡。かきながす。墨田のつゝみ。
きのふけふ。咲きてにほふ花。岡ごしの。あらし吹きふば。
かはかぜの。雨さそひなば。いかさまに。ちりかみだれむ。
志のぶの岡。墨田のつゝみ。あらしにも。雨にもあてじ。
きのふけふ。さきのさかりに。咲きてにほふ花。

河上花　飯田武郷

ゆくみづの。隅田の川は。鳥の名の。みやことふりて。
渡りもり。舟もいそがず。あくるより。くれわたるまで。
ゆきかへり。かよふをぶねの。たえまだに。あらぬわたりを。
みめぐりの。花ほころびて。忘らひげの。森もましろに。
さきにほひ。にほへるさかり。咲きみだれ。みだるゝころは。
みやこ人。つどひきたりて。つゝみには。車つらふめ。
みぎはには。舟をきほひて。ひまもふく。あそぶこの川。
むかしにも。ありやふしやと。みやこどり。とはましものを。
今のうつゝに。

夕鶯　故僧辨玉

うみをふす。ふがき春日に。くれのこり。ふくうぐひすは。

かげかすむ。ゆふべの月に。あはれをば。やらじとやふく。
あはれをば。そへむとやふく。そへむとて。をしまぬ聲か。
やらじとて。すまへるこゑか。きゝわかむ。よしのなけれど。
きく人の。よそにはやらじ。聲のあはれを。

反歌

うぐひすのふけるかぎりはくれぬとて月にのみやはこゝろやるべき。

春の野にきゞすがりするを見てよめる　故日下田足穂

朝がりに。いまたゝすらむ。ゆふがりに。今たゝすらむ。
むりびとの。いでくも忘らに。春の野に。あさるきゞすの。
つまとふと。ねにやふくらむ。子をもふと。こゑやたつらむ。

そのつまは。今かゝらるゝ。その子らは。いまかどらるゝ。
ひきはふつ。もづるのひゞき。なりはずの。音きこもなり。
御獵野の原。

反歌

子をおもふこゝろのやみにかり人のさやぎもしらにきゞすふくらむ。

山吹　故僧　辨玉

春ふかく。かすむ小川の。をちこちに。小舟うけする。
さばしりて。くだるわか鮎の。おちくるを。まちてやつれる。
よりくるを。もりてやくめる。川中を。とめてさでさせ。
川岸を。よきて棹させ。いまをせと。さきてかゝれる。
山吹の。えだやをれなむ。花やちりふむ。

都春望　久米幹文

八すみ志し。わがおほきみは。かむふがら。かむさびせすと。
鳥がふく。あづまの國に。大みやを。たか志りまして。
はろばろに。見したまへば。むさしの海。大江の門浪。
日のたての。大みかどに。ひさかたの。天をひたして。
大御溝と。たゝへたりけり。駿河ふる。富士のたかねは。
むら山を。麓にしつゝ。日のぬきの。大御かどに。
神山と。志づまりいます。うみやまを。高みさやけみ。
もゝふねも。ちぶねもよりき。うまくるま。御民つどひて。
もゝちたる。屋庭のけふり。あまぎらふ。霞がくれに。
やなぎ原。みどりになびき。上野岡。花にふりゆく。

賑びたる。都のはるの。からにしき。たちおよぶべき。
國やふからむ。

○夏

詠雨中橘歌并短歌　鈴木重嶺

あづさゐみ。春さく梅に。つぎてまた。櫻ぞにほふ。
夏されば。花はあれども。香ににほふ。花こそふけれ。
そのはふも。卯花くだし。さみだるゝ。ころにしふれば。
枝たわみ。色もあするを。常世もの。花橘は。
枝ごとに。黄金ふす鈴。今もふほ。かけたるのみか。
志ろがねに。似かよふ花は。枝ごとに。かをる香たかみ。
をやみふき。雨にもあせず。吹きわたる。風にもちらず。

下かげに。たつわれさへに。吾妹子が。とがむばかりの。
香にぞ志みける。

反歌

橘の香ばかりそでに志まめやもあまゝをまちてかげにやどらば。

待子規　久米幹文

春すぎて。夏さりくれば。むしくひと。世にはいはるゝ。
うぐひすの。かひこの中の。ほどゝぎす。はやもおひいでよ。
ならちねの。親に似ぬ子は。鬼子ぞと。よしいはるとも。
志が父に。とびこそこえめ。志が母に。なきこそまさめ。
山里の。卯の花月夜。あけぬまに。とくおきいでゝ。
初聲を。都にいそげ。たち花の。蔭ふむ道を。

たちふらし。山がつふらぬ。人もきかくに。

五月雨をよめる　故日下田足穂

春すぎて。夏さりくれば。たふぐもり。さみだれそめて。
あからびく。晝は志みらに。ぬばたまの。夜はすがらに。
ふる雨の。をやみもやらで。軒端より。瀧はおちつゝ。
いけすより。みをは流れて。はつかあまり。さみだれにけり。
はてはては。海原ふせば。わがやども。海人のすみかと。
人のみるらむ。

田家首夏　故僧辨玉

さくらがり。梅見の友か。いぶせかる。宿とあふづり。

草ふかき。門の畑中。足ふみし。麥生のあとも。
道あけし。うつ木の垣も。ふかみどり。青葉に志げり。
ま志ろに。花にうづもれ。みわたしの。清くすゞしく。
青だゝみ。敷きなすなせり。志ろがねに。かくめるふせり。
ふせやさて。思ひおどすふ。鄙のすまひも。

夜納涼　故日下田足穂

山の端に。入る日はおちて。河の瀬に。月はさしいでぬ。
おばしまに。寄りそひをれば。釣殿の。下ゆく水に。
晝のまの。夏はながれて。岩がねを。うちこす浪の。
音きけば。秋やかよへる。そこゆ志に。ふくるも志らに。
すゞみても。あるべきものを。あづさゆみ。今は寢よとか。

山寺の。鐘はつくらむ。庭つごり。かけはふくらむ。
夏の夜は。ふぜるまもおく。窓のこの。ほがらほがらと。
あけわたるなり。

詠夏月歌并短歌

鈴木重嶺

久方の。天つみそらは。きのふかも。かすみたふびき。
月かげの。おぼろに見えて。ふく風も。のどけかりしを。
やゝやゝに。あつけさまさり。日をさふる。木蔭をたのみ。
すゞまむの。こゝろとふりぬ。ゆふされば。その月かげの。
山のはに。いでくるをまち。その風の。ふきくるをまち。
はしぬして。さやけきかげを。あふぎつゝ。おもはず夜をも。
ふかしつるかふ。

反歌

ふくる夜の月のかつらの下風にかさねまほしき夏ごろもかふ。

田家夕立

故村山守雄

久かたの。照る日をみれば。目くらめき。たゆたふごとく。
あらがねの。土ふみゆけば。足こがれ。やかるゝごとく。
晝顔の。花もあやふく。夕顔の。露もつれふく。
ゆきやらぬ。馬にかぼめと。筧たる。水もからひぬ。
ゆきふやむ。牛にかはめと。道のへの。をぐさもかれぬ。
かくてらす。日のかさふれば。この秋の。み月をいかにと。
ぬえとりの。のどよびしつゝ。夜も晝も。息づきふげき。
うぶすふの。森に七たび。雨ごひの。社に八たび。

鼓うち。笛ふきまつる。ねぎごとを。神やうけゝむ。
雲の嶺。崩るゝやいふ。たちまちに。黒雲ぞまき。
天地の。あやめもわかず。門せとを。さすまあれこそ。
ひかる神。鳴りはためきて。たましひも。けふばけぬべく。
ぞふつ彦。風やいふかす。くらおもみ。雨やふらせる。
その風の。いぶくまにまに。その雨の。ふらすまにまに。
田もあせも。あふれみふぎり。ゆだちの。あとさりげなく。
よひの月。さやかにいでゝ。すゞかせの。かよひしくれば。
木の葉より。おつる雫は。ぬきとめぬ。玉かもみだる。
草の葉に。おく白露は。飛びあへぬ。螢かすだく。
ふげきにし。聲はとたえて。よろこべる。色は穂にいで。
八束穂の。足穂の秋を。空にこそぞれ。

反歌

絲竹にかへてたふそこうちいはふ賤がまことのたのしさぞこれ。

朝顔花

故日下田足穂

わがやどの。はひりの庭の。菅笠に。はひまつはれる。
朝顔の。花のさかりは。はかふくも。もろくもあるか。
露こそは。あしたにおきて。ゆふべには。消ゆといへ。
霧こそは。ゆふべにたちて。あしたには。うすといへ。
朝顔は。あしたに咲きて。あしたにし。うつろひぬれば。
ゆふべには。見るよしもふし。そこゆゑに。あはれぞまさる。
朝顔の。花のさかりは。朝夕の。露よりもろし。
霧よりはかなし。

新竹

久米幹文

我やどの。籬におふる。いくみ竹よ竹。年のはに。
おひそはりふば。かきふらす。琴につくらむ。ふきすさぶ。
笛にきらむと。たぬしけく。思ひしをるに。春すぎて。
夏さりくれば。あらがねの。土かきわけて。おひいづる。
いつくし竹の子。いつしかも。竹にふらむと。はろばろに。
我まちをれば。あまたも。日かずへふくに。いくばくも。
時はすぎぬを。きふらしの。衣ぬぎすて。千尋ふる。
蔭とたちのびて。あしたには。朝露おき。ゆふべには。
夕月やどる。かくばかり。すぐしきかげは。どこふつに。
住みよからむを。笛にきり。琴にふさむと。ふにしかも。

思ひたりけむ。あたらしき。竹のいくみ竹ふたけ。

泊水鷄

飯田武郷

船はてゝ。かしふりたてゝ。むやひすと。さわぐふふ人。
ぬばたまの。さよふけぬらし。去らふみの。音も去づかに。
ふく風も。すゞしくなりて。あまのはら。月ほのめけば。
うちみる。島のさきざき。かき見る。浦のくまぐま。
晝のごと。おしてる庭に。むれたてる。葦の葉かぐれ。
水鷄ふく。聲おもしろし。水のをちこち。

○秋

秋山といふところへ紅葉見にゆきてよめる

春山に。咲ける櫻を。うるはしと。人こそいはめ。
かぐはしと。人こそ見らめ。
そのいろは。うつろひやすし。その花は。さかりみじかし。
おくつゆに。色をふかめて。秋山に。てれる紅葉は。
くれふねの。さかりぞながき。ふる雨に。いやにほひつゝ。
百ちほに。千ちほにそみて。端山。高山のすゑ。
五百はたや。千はたをたてゝ。目もはるに。照りこそわたれ。
とばりをも。はれる山かと。山姫の。織れる錦の。
ふりさけて。見ればまぐはし。ころもをも。かけし峰かと。
さびしさも。わすらえにける。そこやゑに。うさをもわすれ。
見れどあかぬかも。秋山の。峰の紅葉は。

故日下田足穂

見姨捨山月歌并短歌

鈴木重嶺

みすゞかる。信濃の國。更科の。姨捨山に。
のぼりたち。ふりさけ見れば。とりよろふ。山たちふらぴ。
千早田の。稲葉うちふぴき。をちくまの。川とほゞろし。
名ぐはし。さやかの山ゆ。まさやかに。いでくる月は。
まそかゞみ。かけたるがごと。塵はかり。くもりもみえず。
ちかれこそ。とほきむかしゆ。かたりつぎ。いひつぎ今も。
めでたゝへけれ。

反歌

いのちあらばいかでとおもひし姨捨の山の月をもけふみつるかも。

河上月

小杉榲邨

秋の夜は。川しさやけし。おちたぎつ。瀬の音きよし。
川見れば。その浪のほに。月てりて。きよくさやけし。
音きけば。そのたぎつ瀬に。浪こえて。さやけくきよし。
月夜よし。川とほじろし。いざこゝを。清き瀬にして。
よどみてゆかむ。

川月

飯田武郷

漕ぎいづる。舟のまにまに。棹させば。ひかりをちらし。
棹とれば。影はうかびて。をちこちの。岸のさゞふみ。
よるとしも。おもほえぬまで。みつしほの。ひるかとはかり。
見えまがふ。月おもしろし。おもふどち。舟つらふめて。

上つ瀬は。瀬の音はげし。下つ瀬は。ふがれせよわし。
中つ瀬の。中の洲崎の。みつまたの。葦の葉そよぎ。
ふく風の。きよきあたりを。夜もすがら。のぼりくだりに。
あそびあかさむ。

八月望の夕月。まだおぼつかふきほどに。あくがれて。瀧野抱月
庵がり訪らふとて。宿たづねわびて。心あてに見し夕顔の花ち
りてたづねぞわぶるたそがれの宿」白河少將の君。いみじうも
ものし給ひしなど。うちつゞしり。やうやうにして。門の戸たゝ
く大の。ことごとしうもとがむる。またをかし。やがて案内せさ
せて。いざこふたへとて。遣戸より這ひ入りぬ。内のさますさま
じからず。燈火壁にそむけて。ほのかなるは。今宵の心ちらひふ

らむかし。瓶に萩薄さしいれ。或は靈芝。柑子ふご籠にもりて。月に手向けたる主人の心。いとゞふつかしうすみなしたり。さて昔今の物語まめやかに聞えて。月もやゝ中空をわたるほどに。主人。月琴のよくとゝのひたりけるを。うるはしう掻きあはせ。流水の曲かなでられしは。清く澄める月にをりつきよくて。けしうはあらずかし。かゝれば。おのれもたゞにえあらずて。扇つら杖にして。やうやうつゝしりいでし歌。

故 村山守雄

春の夜の。あやふくかをる。梅が香も。袖につゝみて。香をとめば。香をもとむらむ。秋の夜の。隈ふく照れる。月かげも。露にやどして。手にとらば。手にもとるらむ。月かげを。手にとるごとく。月の名の。玉の小琴を。

手にとらし。月にたむけて。かきひかす。水の志らべの。さむけさに。鶴も子おもひ。さやけさに。雁もとわたる。久かたの。天つをとめも。きゝのめで。舞ひやくだらむ。七里に。ひゞきし君が。琴のさやさや。

反歌

月の名の琴のねさむくきこゆふり桂のえだに霜やふるらむ。

詠秋野歌

本居豊穎

朝露は。とをゝにおけど。をみふへし。あせずにほへり。夕風は。吹けどさわげど。萩こそは。志みさびたてれ。かるかやの。下くづをれず。はたすゝき。ふしてみだれず。朝顔の。あさふあさふに。あたらしき。花咲くがごと。

萩の花。もふべもふべに。ちればまた。さきいづるふして。
あらしふく。荒野のそきの。露ふかき。おどろがおくも。
人草は。時どきかえて。そのこゝろ。日にけにひらけ。
言の葉の。花ときみてれ。望月の。いやたゝはしき。
足御代の。秋のひかりに。露のめぐみに。

○冬

禁中雪　飯田武郷

九重の。玉ちく庭を。けさみれば。雪ふりつみて。
常盤ふる。松のこずゑも。そにとりの。青きいろふく。
島山に。あそべる鶴の。いたゞきの。そのくれぬも。
白妙に。いろかはるまで。うちわたす。御垣のめぐり。

ちろがねの。世とふりぬるを。神ふがら。めでたまはむと。
ちらぬひの。その衣笠に。ちらいとの。綱さしはへて。
いでたゝす。みそらを見れば。ちらたまの。君がよそひの。
たふとくもあるか。

詠山家雪歌并短歌　村山守雄

天ぎらひ。ふる白雪を。豊年の。秋のちるしと。
世の中の。人はいへども。賤が身は。いかにさむけむ。
山邊には。木々のえだをれ。ましらふく。聲もわびしく。
野邊には。よたけちたをれ。ふくとりの。音もかふしけく。
老人は。ものかくをちらに。たわやめは。たづきをちらに。
日ふらべて。いやしきふれば。あしびきの。山のたわより。

さくふだり。　くづれおとたて。　杣人は。　おしにうたれて。
たまきはる。　命ちぬちふ。　聞きてだに。　わが身もさむし。
さのみやは。　雪はめづべき。　ものふらふくに。

反歌

斧のおとたえて日かずをふる雪に志づがなげきやこりつもるらむ。
ふる雪をさのみふめでそみやこ人賤かかゝふの袖こそさえめ。

冬鳥　久米幹文

筑波嶺に。　黒雲かゝり。　志ぐれふる。　冬にしふれば。
尾花ちる。　志づくの田井に。　うちふびく。　雁がねとほし。
紅葉ちる。　小山田つたひ。　國めぐる。　あとりかまけり。
その山を。　麓になして。　天の原。　雲居にそゝる。

二なみの。　高嶺かしこき。　男の神に。　雄鳥はをり。
女の神に。　鳴鳥はすみて。　中におきつゝ。
うち羽ぶき。　空もとゞろに。　かゝとふく。　その大鷲の。
聲のさむけさ。

寒梅　小杉榲邨

大悲者の。　志つまりいます。　淺草の。　寺の垣内に。
きのふけふ。　市たてつゞけ。　商人の。　年のいそぎに。
めづらしく。　物みふつらね。　うりひさぐ。　そが中にしも。
瓦やく。　今戸の里の。　はにしらが。　つくるうつはに。
うるはしく。　うゑおふしたる。　寶の樹。　たちさかえたる。
その幹は。　くろがねかも。　そのえだは。　あをがねかも。

その花は。 去らたまかも。 このごろの。 雪に去ぼまず。
このごろの。 あらしにかれず。 きよらかに。 香こそにほへれ。
春まちて。 色のどかふる。 花にふく。 鳥もなにせむ。
めづらしみ。 さゝげもてきて。 今日よりは。 わが倉棚の。
おきたからもの。

○祝賀

恭奉祝立皇太子歌

福羽美静

あまさかる。 ひふもみやこも。 おしなべて。 いはへることの。
世の中に。 おほかる中に。 たふときは。 けふのほぎごと。
うれしきは。 けふのみいはひ。 すべらぎの。 きはめく御世に。
わかみこの。 御位さだめ。 さだめます。 君がこゝろよ。

さだまれる。 君がみうへよ。 うれしかるらむ。
いかさまに。 たふとかるらむ。 むかしもいまも。
神世より。 うけつたへます。 君が御國よ。
さるからに。 たふとき國よ。 ますますに。
よそまでも。 うちかゞやかし。 國のみいつを。
まつふさに。 去りてあふぎて。 よそ人も。
その國に。 あらむかぎりは。 そのたふとさを。
たれもみふ。 いはへる御世に。 よろづのことの。
たふとさを。 千代とことほぎ。 とりまして。
もろびとの。 あふぎたのしむ。 さかえませよと。
今日にもあるかふ。 日つぎの御子の。
うれしさを。 千代とうたひて。

詠寄松竹祝世歌

鈴木重嶺

松こそは。萬代ふときけ。竹こそは。千代ふときけ。
よろづよも。かぎりありけり。ちよもふほ。かぎりありけり。
かぎりふき。君が御代には。たぐふべき。ものこそふけれ。
君がみよには。

出雲の國人青戸氏の新室をほぎてよめる　落合直亮

八雲たつ。出雲の國なる。ふかみどり。松江の里の。
志らかたや。わだみの町は。まちふみの。よろしきところ。
山みれば。やまぐはしく。海みれば。うみおもしろし。
その山の。花をみわたし。その海の。月をふがめて。
うたひふば。こゝろはゆかむ。こゝろゆかば。よはひはのびむ。

そこにしも。ところを志めて。すむ人の。ゆかしくもあるか。
その人の。にひむろつくり。松えかた。松の大木に。
たふびける。青雲をしも。室の名に。おふせたりとか。
ことたまの。さきはふ國と。室の名の。志るくしあらば。
青雲の。たふびくごとく。山松の。さかゆるごとく。
かぎりふく。榮えゆきつゝ。おひの子の。八十つゞきます。
とはにこそ。住みつゞくらめ。その新室に。

反歌

うみの子の八十つゞきますあをくもの五百重にかけてちぎる新室

○仰君

明治元年冬十月幸東京之時謹作歌并短歌

かけまくは。　かしこかれども。　あきつ神。　吾大君の。
うちひさす。　大宮人。　ものゝふの。　八十氏人。
ちよろづの。　みともつらふめ。　あづまぢに。　いでたちませば。
こえがてに。　いゆきふやまし。　つれふかる。　大井の川も。
こゝろなき。　箱根の山も。　ふびかへと。　みさきおはねど。
よりふむと。　おきてまさねど。　御橋はも。　荒波ゆらず。
御輿はも。　かけ路ふづまず。　碕道も。　大路ゆくごと。
波のへも。　たゝみゆくごと。　たひらけく。　やすくのどけし。
來經ふがく。　わたらす旅に。　ひと日だに。　風もおとせず。
ひと夜だに。　雨もそゝがず。　こゝもへば。　いつきもらひ。
去なつ彦。　いふきやなさぬ。　くらながみ。　空やまもれる。

故僧　辨玉

今もふほ。　神世ふがらに。　猿田彦。　みさきにたちて。
いでたゝす。　道やつかへし。　うべふうべふ。　ふびきよりけむ。
こゝろふき。　大井の川も。　箱根の山も。

反歌

八十神もえたちまもらひ山川もよりてつかふるいでましのみち。
枝かはし五十のうまやのふみ松も天の御蔭とみゆきつかへり。

皇都にのぼる時作める歌　故櫻東雄

ひたひには。　矢をばたつとも。　そびらには。　矢をばたてじと。
いさみたる。　こゝろをもちて。　ひとすぢに。　つかへまつると。
ほめひねき。　たまはしゝ。　とりがふく。　あづまをのこの。
うみの親も。　うみのその子も。　かへりみぬ。　ますらたけをぞ。

海もかば。　みづくかばね。　山もかば。　草むすかばね。
大君の。　へにこそ志なめと。　ちゝのみの。　父をはふれて。
はゝそはの。　母をはふれて。　あしびきの。　山をふみこえ。
わたつみの。　海をわたりて。　あきつかみ。　わがおほきみの。
おはします。　御京にのぼる。　かくまでに。　おもふこゝろと。
大きみは。　志ろしめさねど。　天つかみ。　國つみかみは。
ことごとに。　志ろしめさねど。　うれしけく。　われはぞのぼる。
君がみさとに。

反歌

一足もあゆめばあゆむたびごとに都にちかくふるぞうれしき。

天皇の國見とて行幸ありける時よみて奉れる歌

やすみ志し。　わが大君の。　神ふがら。　きこしをしける。
天の下の。　國てふくにに。　島はしも。　さはにあれども。
浦はしも。　おほくあれども。　みちのくの。　道のくちふる。
鹽釜の。　千賀のうらわも。　松島の。　八十島かけし。
うらばかり。　をかしきはふく。　島ばかり。　めでたきもなし。
このうらよ。　この島つたひ。　ふねうけて。　棹さしつれて。
こゝのさき。　かしこの岸を。　見めぐれば。　いとおもしろく。
ふがむれば。　いとしもたぬし。　かばかりの。　うましさかひも。
あまさかる。　鄙にしあれば。　ゆかしとは。　きこしけめども。
見てしがと。　おぼしけめども。　あきつかみ。　わがおほきみの。
いでましは。　今日にぞはじまる。　千賀のうら。　ちかひ久しく。

落合直亮

松島の。まつかひありと。山川の。ためしも志るく。
よりてしも。神はさかえむ。うれしとは。民はつかふる。
あきつ神。わがおほきみの。みいつかしこみ。

反歌

西のうみのいでましありどきゝしより今日のみゆきをまつがうら島。

○教訓

人道

故櫻東雄

わがきみに。まさる君なし。わがおやに。まさる祖ふし。
わが君は。今のをつゝに。あまてらす。日のおほかみの。
うつの御子。わが祖は。日の若宮に。おはします。
かむいざふぎの。おほみかみ。わがきみに。まさる君ふし。

わがおやに。まさる祖ふし。たふときこの身。うれしきわが身。

言志

故櫻東雄

死にかはり。いきかへりつゝ。天地の。よりあひのきはみ。
あきつかみ。わが大君に。ひとすぢに。つかへまつらむ。
ことしあらば。くふたふれらを。きりはふり。いのち志ふんと。
むらぎもの。こゝろさだめて。つるぎたち。どぎてしあれば。
月の夜も。花のあしたも。あはれさの。ことにしありけり。
これぞこの。神代のまゝの。人のまごゝろ。

反歌

人に似ぬこゝろを神のつげしよりけふるおもひもわれはするかな。

東京大學古典講習科開業之日爲生徒聊述心緒歌
并反歌

本居豐穎

高ひかる。日の御子の。きこしをす。これのやまとは。
あめつちの。かためし國。ことたまの。さきはふ國。
うらやすと。名にかゝす國。うまびとの。國と志かし國。
いにしへの。その國ぶりを。つらつらに。おもへばたかし。
まさやけく。志れば志たふとし。三栗の。ふかいまの世と。
人ごころ。うつろふまにま。外國の。こともまじらひ。
わざ志げく。なりゆくふべに。いにしへの。まゝにはあらず。
志かのみに。うつろひこしも。神ふがら。定めたまへる。
國かたは。今もかはらず。かくのみに。かはらひこしも。
志きしまの。やまとごゝろの。をゝしろは。後もたゆまず。

ものごとに。かくぞことわり。世はなべて。志かこそありけれ。
うつるべき。ゆゑよしありて。うつりこし。國のてぶりぞ。
かはるべき。ことわりありて。かはりこし。世のさまふらし。
かくゆゑに。うつりこし。そのゆゑよしは。書見て志らゆ。
志かゆゑに。かはりこし。そのことわりも。書見て志らゆ。
そのふみは。いづくの書。わがくにの。いにしへの書。
そこをしも。おもほしはかり。こゝをしも。おもみしせすと。
いにしへの。ふみよみあかし。今の世に。思ひくらべて。
をすくにの。みまつりごとも。おふふおふふ。たすけまつらひ。
ひらけゆく。この大御代を。いやすゝめ。すゝめたらはす。
いそしき。ますらをがね。まめなる。おみの志ためと。
えらまえし。おみのをのこは。いたづらに。もだあるべしや。

いなづらに。ふみよむ人。むかしく。もの云る人の。
ふほふほの。人にはふらど。國のため。大御世のため。
いさをたつる。人としあらむと。をごゝろを。こゝにふりおこし。
まごゝろを。そこにつくして。天地の。かためし國。
ことたまの。ささはふ國の。名をしも。つたへざらめや。
うらやすと。うまひとの國と。いやあふぐがねに。いやかゝすがねに。

反歌

いにしへの野中の清水ふがれこしすゑのみあさく汲みてあるべしや。

臨親友會述心緒歌　黒川眞頼

まことはし。人のまごゝろ。いつはりは。人のつくりて。
ひとはかる。きたふきことぞ。われはもよ。人はからど。

まことも。友とむつべば。友が中にも。
よきともに。むつたまあひて。よきがかずそふ。
世の中に。ほこらふことは。ひとつだに。あらぬ身ふれど。
これひとつ。われはぞほこる。妻にも子らにも。

○詠史

彦火々出見尊の八尋鰐に乗りて本つ國にかへり

たまふかたに　小中村清矩

わたつみの。神の宮邊ゆ。かしこしや。鰐のそびらを。
千里ゆく。龍の御馬と。天がける。鳥の御船と。
たひらけく。乘らしゝ皇子は。上つ國の。やからこひしみ。
わたの宮の。妹ふつかしみ。こもりづの。去たのおもひは。

さまざまに。　さわがしけむも。　わだふかの。　涙はさやらず。
ふなとべの。　風にもあてず。　つゝみふく。　かへしまつりし。
さひもちの。　神のいさをゝ。　さふがらに。　うつしいだしゝ。
うつしゑの。　ぬしはこの世の。　ふがひとゝ。　人にいはれて。
年まねく。　ふみらあさりて。　神の道。　ときひろめてし。
彦麻呂のをぢ。

讀景行天皇御紀時不堪感慨聊述心緒作歌并短歌

本居豐穎

熊襲の。　襲の川かみの。　熊こそは。　こはしといへ。
薦河の。　焼津の野邊の。　猪こそは。　たけしときけ。
荒熊の。　あらびふにぞと。　いかり猪の。　いかりたけばし。

新室の。　うたげの庭に。　をとめ子が。　もりてさゝぐる。
うれうりふす。　きりはふらし。　かべくさに。　をぢがかるとふ。
荒草の。　焼きはらはせる。　大かゞみ。　火うつぶくろは。
みいつの。　かぶやく赤るし。　葦の浦。　竹の水門は。
あたのふす。　名にこそありけれ。　をごゝろし。　そこにすゝみて。
みこゝろか。　こゝにあるべる。　みふくろの。　口ゆひかため。
いましめし。　をばのみことの。　みしへごと。　わすらすべしや。
たまちはふ。　神のみつるぎ。　いはまくは。　かしこかれども。
ふにぞはも。　ときおかしけむ。　そこゆゑに。　あらぶる神の。
いぶき山。　山風おちて。　おほみそで。　氷雨にやれ。
おほみくつ。　岩根にふづみ。　空ゆも。　かけるみこゝろ。
くやしくぞ。　みつゑとらしゝ。　くやしけく。　そこに思ひいで。

かふしけく。こゝにおもへど。すへらぎの。まけのまにまに。
ひとすぢに。たてしみいつは。東に西に。ゆきとほり。
天がける。八尋ちら鳥。たかだかにして。

反歌二首

おものせしあまりの蓆のかたはしも思へばゆゝしいへばかしこし。
平群山熊樫が葉をふさ手をり天がける御靈いざまつりてふ。

明治十八年十二月十三日恭祭典崇道盡敬皇帝

一千百五十年正辰作歌　小杉榲邨

飛鳥の。淨見原に。宮ばしら。ふとしきたて。
天の下。ちろしめしける。すへらぎの。皇子のみことを。
かぞふれば。さはにいませど。たふときや。これのみことの。

あをによし。平城の宮に。まつりごと。まをしたまひし。
そのかみの。みいきを思へば。百千世の。松にかつらに。
いろかへず。枝葉みだれず。もとふとく。朽ちずさかえて。
ときはふす。國のちづめと。つきたつる。高城のそこの。
石むらと。たゝへたまひし。おほみこと。たかくたふとし。
ちかれこそ。いともめでたき。うづたから。やまとみふみを。
ことゝりて。ちるしましけれ。うべふうべふ。みきをの松の。
まつぶさに。君と臣との。道たてゝ。五百箇桂の。
ちみゝにも。あつめえらばし。うごきふき。日嗣のみすぢ。
いはむらの。かけずくだけぬ。みよみよの。ありのまことを。
もとかたく。をさめふしえて。みかとべに。たてまたしたる。
三十巻の。そのみふみはや。神御世の。そのかみごとの。

くすしきも。いとあきらかに。皇御代の。そのふることの。
ありさまも。ねつるくまふく。奥山の。八峯のつばき。
つばらかに。傳へたまひし。みたからの。ふみぞこの寶典。
ふみまふぶ。わがとものがらも。かたはしを。うかゞひ見つゝ。
この皇帝の。御名はわすれず。おひゆかむ。まふびのわざぞ。
この親王の。御魂のふゆの。時はいま。冬のさかりと。
霜雪の。そのふりし世を。千年あまり。百年あまり。
五十年と。ことしかぞへて。おふけなく。ふぬびあふがひ。
をちふきや。去このますらを。ふりおこす。ますらをごゝろ。
かけまくも。かしこけれども。うつしゐの。みかたをたかく。
玉だすき。かけのよろしく。御祭の。塲きよまはり。
神わざを。つかへぞまつる。あはれあはれ。かくしつかへて。

御勳績を。かしこむなへに。むつたまの。あひかたりあひ。
御代々々の。歴史よみとき。今の世の。國典いたづく。
この道の。博士もろもろ。かきかぞへ。うちつどへつゝ。
今日はしも。袖をつらねる。星の岡。これの御前に。
おのもおのも。歌文つくり。たぬしくも。高屋のうへに。
ぬばたまの。夜霧たなびき。あしびきの。山かげくらく。
ふるまでに。酒うたげして。あそびくらさな。

賞歎児島高徳朝臣忠烈歌并短歌　船曳鉄門

名ぐはしき。児島の朝臣は。太刀ふらば。吉備のつるぎ。
花ふらば。芳野のさくら。おもほさぬ。風の音の。かしこきや。わが大君の。
遠音にきゝて。

高ゆくや。　はやぶさふす。　かりみやの。　宮へにいしき。
大御馬の。　口おしとゞめ。　みやこべに。　かへしまつらひ。
たふれらを。　うちてきためて。　おほきみの。　志づのみこゝろ。
すむやけく。　志づめてましと。　人志れぬ。　こゝろのそこひ。
ありたてる。　花さくら木を。　かきけづり。　うつしいでつゝ。
吉備つるぎ。　身は志たふがら。　雲のうへに。　聞えあげゝり。
きこえあげし。　そのひとふしは。　きへづるや。　漢言にあれど。
志きしまの。　やまとごゝろの。　天の下。　萬代かけて。
みよしのゝ。　芳野の花の。　花のむた。　かをりみてるかも。
にほひみてるかも。

反歌

漢言にうつしいでゝも志きしまのやまとごゝろぞ花ににほへる。

楠公櫻井驛訣別の圖を見てよめる

久米幹文

もゝしきの。　大宮人の。　春のゆめも。　まださめぬまに。
西の海ゆ。　鯨をたてくる。　いすくはし。　鯨のいぶき。
天のした。　すでにおほふと。　やすみ志し。　吾大君の。
おほゝしく。　おもほしめして。　神はらひ。　はらひそけよと。
のりたまふ。　御言かしこみ。　さゝらがた。　錦の御旗。
風のむだ。　空になびけて。　皇軍を。　ぬてゆく君が。
つばらつばら。　きこえあぐるを。　まことゝも。　おもほしめさず。
はかりごと。　きこしめさねば。　今は世に。　いきてふにせむ。
たまきはる。　いのちさゝげて。　あきらけき。　きよきこゝろを。

すめらべに。つくしはてむと。ひとすぢに。おもふものから。
われふくて。後の秋風。さもこそは。あれまさるらめ。
いかさまに。すゞろふらむと。かにかくに。思ひのこして。
花くはし。櫻井のさとや。かこゞもの。たゞひとり子を。
ふるさとへ。かへしやるとて。まことゝ汝よ。おやの子ならば。
をしへおく。ことふわすれそ。おひたちて。人となりふば。
くふたふれ。きたなき奴を。うちきため。はらひつくして。
みこゝろを。やすめまつられ。あらしふく。いくさの庭に。
みよしのゝ。花とちるとも。葛城の。峰いやたかく。
家の名を。雲ゐにあげよ。ひもがたふ。いよゝとぎつゝ。
わがこゝろ。つぎてをあれと。ねもごろに。をしへさとして。
湊川。流るゝ水の。ふたゝびは。かへらぬ道に。

いそぎけむ。そのおもかげを。みればかふしも。

反歌

さくら井のつひのわかれの言の葉にやまとごころゝの花ぞにほへる。

詠准后親房卿歌　小杉榲邨

ふく風の。南に北に。あまたたび。たちひるがへる。
みだれ世の。時にしあれど。ひとかたに。旗手おしたて。
とごゝろを。かたく定めて。いしゆみの。おもひくだけし。
益荒雄の。誰はあれども。かしこきや。わがおほきみに。
まごゝろを。たてゝつくして。太刀が緒も。解きあへなくに。
天ざかる。鄙のなかぢの。道とほき。小田にいほりて。
こゝのへの。みやこの外の。あら山に。志みさかえたる。

常磐木の。かれず志ほます。君こそは。いさをたてつれ。
志かたてし。君が勳績を。かぞふれば。さはにあれども。
わが國は。神と君との。すぢきよく。君と臣との。
道ことに。たちてうごかず。君はしも。かくこそあれ。
臣はしも。志かこそあれと。さましくも。あげつらひたる。
たまぼこの。三卷のみふみ。そのふみの。一卷見ても。
おほきみに。二ごゝろふく。ひとかたに。こゝろさだめて。
いそしみし。まことぞ志るき。うべふうべふ。神ふりけりと。
後の世の。今のをつゝに。おほやけの。神とあがめて。
人みなの。いたゞきまつる。君こそは。まことますらを。
君こそは。まこと神なれ。志かばかり。風ふきあれし。
みだれ世にして。

班婕妤　飯田武郷

さかしかる。君の御代には。さかしかる。臣とたぐひて。
あけたては。かたはらさけず。くれもけば。みもとはなたず。
いれひもの。おふごゝろに。世ををさめ。ありときゝしを。
花鳥の。いろねにおぼれ。たきものゝ。かをりにめでゝ。
たわやめと。たぐひありかば。後の世の。長きためしに。
小車の。ひかれやせむと。から國の。さかしをとめが。
おしかへし。いさめしことば。今もふほ。ふみにのこして。
人ぞいふふる。

觀明人鄭成功所書大字摺本詠歌　小中村清矩

かすみたつ。　ながき春日を。　ひとりのみ。　くらしかねつゝ。
思ふどち。　かたらひよりて。　うまさけを。　くみもかはしつ。
宇治山の。　木の芽をにつゝ。　こしかたの。　こともいひいで。
世の中を。　うちもなげきて。　かたへふる。　壁をし見れば。
をゝしくも。　書きつる文字をば。　常磐なす。　石にえらして。
まさかにも。　紙にうつせり。　はしきやし。　文字のすがたは。
天　雲　に。　乘りてみそらを。　かけるちふ。　龍かとぞみる。
これぞこの。　やまとにあれて。　から國に。　千名の五百名を。
かぐはしく。　いやとほながに。　とふへゆく。　ますらたけをが。
書きふせる。　あとにざりける。　こを見れば。　むかしおもほゆ。
かの國は。　くぬちまひろく。　人さはに。　うまはるからに。
八十國の。　國のおやぞと。　こにきしい。　おもひほこらひ。

つゆ去もの。　霜をめぐます。　あさよひに。　あそびたのしみ。
たゝかひの。　道おこたれば。　年ごとに。　國はみだれて。
せむすべの。　たどきを去らず。　その代には。　おもひあふづり。
えだ國の。　つらにかぞへし。　北の邊の。　えみしがともの。
荒　駒　に。　いはみうちのり。　いたやぐし。　つらねはふちて。
せめきほひ。　おそひきぬれば。　ものゝふの。　八十伴のをは。
そびらなる。　ゆぎとりすてゝ。　木の戸はも。　われとひらかし。
時のまに。　廣きくぬちも。　つぎつぎに。　かれにまつろひ。
むかしより。　定めおきてし。　國ぶりの。　人のすがたも。
ぬばたまの。　くろがみけづり。　去きたへの。　右手せばめ。
去こめきし。　えみしがふりに。　おほかたは。　かばりゆきけり。
そのときに。　この君が父は。　さすたけの。　君につかへて。

ふたつふき。身をたふたりて。たまきはる。命ををしみ。
えみしらに。勝をりふせて。おぞましく。まつろひにけり。
この君が。母ふる人は。さへづるや。からにはをれど。
うまれつる。神のみゝにの。日の本の。やまとごゝろは。
人ごとに。かくこそあれと。つるぎたち。手にとりもちて。
をゝしくも。いのちたにけり。よそふがら。おもひやるだに。
いとゞしく。涙はふれぬ。その子ふる。君がこゝろや。
いかばかり。かなしかりけむ。たかはあれど。千萬人に。
すぐれたる。君にしあれば。ますらをや。ふげきふすべき。
たけをやも。いさちてあらじと。すむやけく。いくさおこして。
君とおやの。あだにぞあなる。えみしらを。うちもつくして。
君が代を。ふりおこさでは。山川の。やまじものをと。

いつしき。きがみたけびて。風の音の。遠音にありて。
かすかにも。ふがらへにける。そのきみの。ありかたづねて。
いくさ人。つどへたたがへ。あつき日も。息もやすめず。
さむき夜も。ふすまかつがず。たゝかひに。いそしみぬれど。
世の中は。すべふきものか。ふすごとに。事のたがふを。
おもひわび。つかれたぬとも。よしたやし。人みふうせて。
瓣の實の。一人とふらむと。よしたやし。こゝろたゆみて。
いたづらに。やみはてじと。うふばらに。大船うけて。
荒潮の。汐路遣ぎわき。うちみやる。島根にいたり。
その島の。えみしをたぞけ。その城をし。ありかとさだめ。
人草を。ふづけめぐみて。たゝかひの。のりをとゝのへ。
時まちて。軍はせむと。たまきはる。うちのかぎりは。

まごゝろの。かはらざりけり。うべしこそ。とにあらはれて。
かりそめに。書けるあとにも。ますらをの。をゝしきこゝろ。
ちかすがに。あらはれにけれ。いふしこめ。ちこめき國と。
おのがほど。ちらぬえみしも。この君の。ことし思はゞ。
あきつしま。やまとの國は。天づたふ。日のつぎつぎに。
すへらぎの。あきつみかみと。遠長に。ちろしめすふべに。
うまれいづる。人はかしこく。國の名に。おへる瑞穂は。
うへもふく。すぐれてありと。つらつらに。思ひちるらむ。
すめがみの。きはひまして。くすはしく。いかき國ぞと。
ひたぶるに。かしこみもせむ。よろづ代までも。

楊貴妃　安部真貞

氏はしも。楊にしあれば。あをやぎの。細き眉根を。
ふつかしく。ゑみまがりつゝ。ふがき真髪を。
うつくしく。かきけづらひて。をとめ子の。
よろし女の。くはしめはしも。こにきしの。
こにおると。思ひほこりて。天にあらば。
相寝する。鳥にもがも。羽さしかはし。
むつみあふ。木にしもがもふ。地にあらば。
あめつちに。うけびしものを。枝さしかはし。
たまきはる。をしき命を。死も生も。
夫ゞもの。ころびし日より。君がまにまと。
ふげゝども。ちるしもあらず。世のみだれとて。
桃の花。さきてるみては。荒野らにしも。
春風に。くれふゆの。おもわちぬばひ。

秋の雨の。　赤きしきふりて。　桐の葉の。　おつるを見ては。
ほろほろに。　涙ふがさひ。　夕宮に。　うらさびくらし。
螢とぶ。　みそらあふぎて。　かぎろひの。　こゝろもえつゝ。
魂すらも。　あこがれにけむ。　小夜床に。　息つきあかし。
ともし火を。　かゝげつくせど。　冬の夜の。　長きうらみは。
とこしへに。　盡せざりけむ。　むかしより。　かくのみふらし。
いにしへも。　赤かなるからに。　ますらをと。　いはれし人も。
たをやめの。　まどひによりて。　國をしも。　つひにかたぶけ。
大城をも。　かたぶけしとふ。　あやにあやに。　忌々しきものぞ。
こひのまどひは。

○懷古

南朝懷古歌

本居豐穎

鹽やきし。あまりの琴の。枯野こそ。七里ひゞけ。
よしの山。峰の楠木。すべらぎの。御船につくり。
赤が船の。はやくしあれば。赤が船の。堅くしあれば。
相摸の海。波もくだけぬ。筑紫の海。風もふにぞと。
天の下。思ひたのみて。大船の。ゆたにある時に。
船人の。こゝろをちふみ。みふと川。はやせの水に。
真舵をり。沈みてうせれ。そこもへば。あやにくやしも。
こゝもへば。かなしかれども。よろづ代に。くちぬ赤が名は。
七里に。千里にみちて。今もさやさや。國もさやさや。

高松懷古

本居豐穎

ものゝふの。　とるや真弓の。　本つよみ。　よせずなびかす。
あまそゝり。　そゝりたちけむ。　高　松　の。　大城もすりて。
ふきしをる。　あらしもなにぞ。　城門ひたす。　波もふにぞと。
ふみたけび。　たけびてありしも。　すゑつひに。　せむすべをふみ。
ちよろづの。　いくさ人らが。　たまきはる。　命たすくと。
身ひとつに。　おひてかはると。　乘るふねの。　もたのたもたに。
うたひつゝ。　うせけむ君が。　まごゝろを。　おもへばたけし。
そのこゝろ。　去ぬべばかふし。　そこゆゑに。　涙はいまも。
ましみづの。　わきてふがれて。　せきあへふくに。

反　歌

高松はたかきいさをゝ千年まであふがむための名にこそあるらし。

登下總國葛飾郡國府臺懷古作歌并反歌

小中村清矩

ほとゝぎす。　なきてとよもす。　さみだれの。　はれまうれしと。
手　束　杖。　すゑつきたてゝ。　とりきたる。　はりすり衣。
にほどりの。　葛飾野邊の。　いにしへの。　跡見にゆくと。
わが家を。　逆井すぎて。　市　川　の。　河の瀬わたり。
あつき日に。　笠とりおほひ。　草かをる。　夏野をゆけば。
去もと原。　去もとのをちに。　ふりにたる。　寺のあたりぞ。
いにしへの。　あがたの跡と。　里　人　の。　教ふるまにま。
その寺の。　庭をみぎりに。　ま木立てる。　道の八十隈。
ひとすぢに。　ゆきのぼらへば。　たひらけき。　をかひにいでぬ。
その岡ゆ。　わがみさくれば。　ゆくみづの。　利根の河瀬は。

その岡の。　ましたに流れ。　鷲のすむ。　筑波の山は。
そかひにぞ。　神さびたてる。　志ろたへの。　富士のたかねは。
天　雲　の。　うへにそびえて。　大江戸の。　わぎへのかたは。
たなびける。　そのたえまゆ。　ほのぼのと。　けぶりきらへり。
法の師の。　われにかたらく。　篤のはふ。　谷のいはまは。
そのかみに。　敵まもらふと。　つきたてし。　岩城のもとに。
めぐらしゝ。　ふがれのあとぞ。　苦むして。　立てるいはほは。
二ごゝろ。　ふしと誓ひて。　主のため。　命志にける。
ますらをの。　おくつきどころ。　ましばおひ。　志げれる岡は。
さゝげたる。　小旗のもとに。　百八十の。　楯つらふめて。
いくさ人。　いはめる跡ぞ。　水沫よる。　かけぢのもとは。
いはゞしる。　水をたのみて。　もるひとの。　おこたるひまに。

あたどもの。　襲ひしあとゝ。　つばらかに。　かたるをきゝて。
きもむかふ。　こゝろをいたみ。　いにしへの。　その世おもへば。
天　地　の。　神のこゝろや。　いかさまに。　うらさびましゝ。
大　八　洲。　國中ことごと。　たゝかひの。　ちまたとなりて。
あしたには。　かけらふ駒に。　日のかげも。　塵にくもらひ。
ゆふべには。　放つ矢志げく。　かきくらし。　ふりくる雪と。
うちみだれ。　家もわすれて。　もろびとの。　あらそふときに。
大　直　日。　神のこゝろと。　あらたまの。　年がきふれば。
うつせみの。　世はをさまりて。　そのかみの。　弓矢かくみて。
時まねく。　ゆきかひしけむ。　ものゝふの。　かげだに見えず。
さやげりし。　鼓のおとも。　河　浪　の。　音にまぎれて。
山　松　の。　梢のあらし。　さそひきて。　ゆふべをつぐる。

鐘の音ぞする。

反歌

いにしへの國府とも志らじものゝふのかばねにむせる苔にうもれて。

小峰城懷古　安部井磐根

たぎちゐく。音にきこゆる。白河の。小峰の御城は。
朝日の。日むかふ御城。夕日の。日かげる御城。
あづまの。志づめの御城。大御代の。まもりの御城。
雲の上に。たかくそびえて。大そらに。かすむやぐらの。
くらごとに。千張八千張。五百千張。をさめし弓の。
櫨弓の。はしめをとへば。天ぐもの。むかぶす國の。
ものゝふと。御名かゞやかし。ますらをと。稜威ふりたて。

むかもゝに。いふみおとしゝ。堅庭の。まひろき庭の。
わが丹羽の。二代の君い。いたけくも。はからしけらく。
こゝはしも。遠きむかしべ。みちのくに。いりたつ關路。
みちのくゐ。いでたつ關路。その關の。あとたえし世の。
かりごもの。みだれし世には。うまびとの。ふらしゝところ。
まめびとの。つかへしところ。きもあらばあれ。おほにや思ふと。
真木柱。太敷立てし。みこゝろの。すゝますまにま。
いやふかに。壍めぐらし。いやたかに。石たゝみあげ。
はるかふる。千年をかねて。志めてしあらば。きづか志し。御城にぞありける。
この御城を。ちよろづの。敵もふにぞと。世々ひさに。楯もふにせむ。
一年の。世のみだれに。ちはやびと。いひこしものを。そこゐいよらひ。

おほみいくさ。こゝにこもらひ。おしかへし。あひたゝかへば。
そこきよく。すみて流れし。白河も。あけにうつろひ。
あたのなみ。たちのさわぎに。うちはじく。火箭のひゞきは。
天をやき。地をもゆすり。甲子が嶺も。今かもくやす。
關の海も。ほむすびの。神さへあらび。はかもふき。けぶりとふりて。
ほむすびの。神さへあらび。はかもふき。けぶりとふりて。
いまはーも。外のへ内のへ。中の重の。わつきはあれど。
焼きさりし。その世の殿の。おほとのゝ。影は見ゆれど。
草ふかみ。目かもまどへる。いなをかも。あとかもあれし。
見るわれは。ふぐさめかねて。ゆふづゝの。かゆきかくゆき。
たもとほる。茅原が中に。ありたてる。老木のさくら。
もとの世に。かへさまほしと。ひとむきに。いひこそいへれ。

いにしへに。なめしふき世と。國々に。ありこし御城も。
島々に。ありへし御城も。田に畑に。園にやにはに。
月草の。うつろふ思へば。天がけり。國がけりつゝ。
神ふがら。つかへまつらす。はしきやし。君が御魂は。
この御城の。かくなるこそは。高ひかる。吾日の皇子の。
ふとたかす。國のみさかえ。いましら。生ける志らしありと。
みそふはすらむ。

反歌

花ちらふ小峰の御城のあとことへばそこことも志らにきゞすふくふり。
きゞすふく小峰のさくら風すぎて花のかげさへあれはてにけり。

秋日登上野岡有感作歌　小杉榲邨

ひむがしの。御里の北邊。水たまる。池の上野に。
のぼりたち。むかしをとへば。ゐく人の。我にかたらく。
七　年　の。そのかみこそは。大　寺　の。垣内ふりしを。
くなたふれ。あたと名たちし。ものゝふの。かきこもらふと。
大　御　命。いたゞきもてる。官　軍　の。八十伴緒の。
十重廿重。めぐりかこみて。たゞせめに。責めつるはしに。
うちはふつ。大　砲　小　銃。いかづちと。ふりこそとよめ。
きりはふる。太刀なぎふたは。いなづまと。きらめきわたれ。
そのひゞき。きゝのかしこく。そのひかり。見のおそろしく。
ほとけます。高き樓閣は。時のまに。烟とふりつ。
ものゝふの。建雄が伴も。露　霜　と。いのちきえつゝ。
血がかばね。岡山をふし。血が血は。楯をふがせれ。

血かれども。かしこき王威。天　の　下。すでにおほへば。
たゝかへど。いかで勝ちえむ。あらそへど。何をかふさむ。
玉　も　つ　き。太刀もくだけて。いのち血に。かばねもはふれ。
燒きのこる。門　の　釘　貫。うちこめし。玉のかずかず。
きりつけし。太刀の痕さへ。今もふほ。さやにみゐるを。
石　つ　み　て。たておくつかは。やゝやゝに。苔むしわたり。
そのかみの。ここのもとすゑ。血る人の。ありやふしやと。
いふがかふしさ。

反　歌

ますらをのくちぬかばねにむす苔の露の上野に秋風ぞふく。

南を　ば。　かげもといひて。　いにしへゆ。　人のむかしみ。
北はしも。　そともといひて。　むかしより。　人ぞうとぶる。
かけまくも。　かしこきかも。　いはまくも。　ゆゝしきかも。
名ぐはし。　吉野の宮。　玉志き。　平安の宮と。
高ひかる。　日のおほみかど。　二かたに。　わかれし御代の。
高御座。　天つ日嗣の。　ふたはしら。　いましゝ御代に。
北ばたけ。　氏と名におへる。　ますらをの。　君のことごと。
北はしも。　うとびましつゝ。　南を　は。　むかしみまして。
よき人の。　よしとよくみて。　よしといひし。　吉野の宮の。
大宮に。　つかへまつろひ。　天つ日の。　あかきこゝろを。
かげもに。　つくしたまふと。　君のため。　草むすかばね。
あしびきの。　山ゆくとては。　あづまぢの。　やつをふみこえ。

君のため。　みづくかばねと。　いさふとる。　海ゆくとては。
筑紫路の。　八重浪わたり。　まつろはぬ。　國をことむけ。
千はやぶる。　人をもやはし。　かしこきや。　そのみいつはも。
日のたてに。　いてりとほさひ。　たふときや。　そのみいさをは。
日のよこに。　てりかゞやかし。　天てらす。　日霊のみこと。
神ふがら。　忘づまりませる。　神風の。　伊勢の國をし。
世々かさね。　うしはきたまひ。　いちしばの。　一志小國に。
年をへて。　いましたまひぬ。　そこもゐに。　ふがき代までも。
そのみいつ。　そのみいさをゝ。　かき忘るし。　かきつたへつゝ。
そのふみを。　見る人ごとに。　そのみいつ。　あふがざらめや。
そのふみを。　よむ人みふの。　みいさをゝ。　たゝへざらめや。
ふがき代までに。

○開化

傳信機　故日下田足穂

八千本の。柱をたて。ひとすぢの。絲金かけて。
ちほふわの。とゞまるきはみ。人ぐさの。おひたつかぎり。
ひきわたす。絲傳ひやく。ことづては。耳にもいらず。
言の葉は。目にもみえねど。千里をも。一日のうちに。
やきかへり。とへばこたふる。たよりをば。誰かはめでぬ。
いとほそき。絲金ふがら。いとふとき。いさをたてけり。
八千本ばしら。

反歌

雲のうへ波のたたをもやきゝしていとたよりよきふみつかひかも。

看蒸氣車走鐵道偶爾作歌　故僧　辨玉

ひさかたの。空のどけきを。鳴神か。くづれたちくる。
龍神か。いまきのぼれる。かきくらし。雲ぞおこれる。
ふりひゞき。音ぞとゞろく。その雲は。たく火のけぶり。
その音は。車のひゞき。たちとまり。見るまもあらず。
つらなれる。屋形のうちに。こゝばくの。人つどへのせ。
ちきわたす。くろがねの道。はしりてすぎぬ。

觀習練西洋兵法作歌　故僧　辨玉

とつ國の。人をあがけば。さふがらに。すがたはうつれ。
とつくにの。よそひをすれば。さながらに。かたちは似つけ。

黒髪の。もとゝりはらひ。ちゞみ毛に。きりつくらし。
長太刀を。ひとふりはかし。筒袖の。鶉衣に。
烏羽の。黒織ぶくろ。かぶとふし。とりかゝふり。
澳つごり。胸見かへりみ。たちぬも。こはふさへり。
鶴羽なす。黒皮沓に。鶴脛に。毛織はき。
はかまふし。とりよそひ。あゆみも。こしよろしと。
馬にのり。かちゆきつゞき。のりのむだ。かゆきかくゆき。
むれわかれ。かよりかくより。うちつるゝ。火筒のけぶり。
黒雲の。おりゐるごとく。うちはふつ。火玉のひゞき。
いかづちの。とゞろくごとく。大鼓。うちのきほひに。
喇叭ちふを。ふきのすゝみに。もころをに。まけてはあらじと。
おのもおのも。つとめいそはく。うべふうべふ。すがたかたちの。

さまをのみ。似せてありふば。うつしゐのごと。

詠横濱瓦斯燈歌　故僧　辨玉

大船の。はつるみふとの。横濱は。諸國人の。
商しこり。つどへるふべに。物ごとに。たよりよかれど。
かしこきや。みおもひかねに。からくにの。人のさとりて。
くすしくも。たくみいでたる。ともし火を。こゝにもうつし。
たてふめて。造らせりけむ。あかねさす。日のくれゆけば。
天つほし。つらふるふして。大空も。かゞやくばかり。
うつろへる。火の氣かをりて。雨ふれど。雨にも消えず。
風ふけど。風にもゆれず。八巷の。市のうゐ木の。
青柳の。もゆるめざしも。さく花の。八重かさふるも。

並松の。ふげき梢も。くまもおちず。さやに見ゆれば。
ここしへに。晝ゆく國と。うつたへに。夜ふき里と。
夜もすがら。いゆきかひらひ。ゆくゆくも。高くぞあふぐ。
かゞやける。このこもし火の。天地に。いてりとほれる。
大みめぐみを。

瀛車　本居豐穎

富士の嶺の。雲のたちぬを。ときふく。うつると人いふ。
あすか川。水の淵瀬を。さだめふく。かはると我聞く。
山川を。たゝちにつくり。石炭を。けぶりとふして。
ひさかたの。天をくろまし。あらがねの。地とよもして。
たゞはしり。はしる車の。窓の外を。見つゝしをれば。

小林は。田畑とかはり。山さりて。海原ひろし。
あやしくも。かける車か。くすしくも。つくれるわざか。
千はやぶる。神わざふらぬ。人の世にして。

反歌

ゆきとほり國原見れば天雲にそりたゝしけむ神代しおもほゆ。

○動物

雲雀　故日下田足穂

春の日の。春日の野邊に。わかくさの。妻こもれりと。
さぬつとり。雉子ふくらむ。わかくさに。めづ子こもると。
天がけり。霍雀ふくらむ。きゞすは。妻をやこふる。
ひばりは。めづ子やおもふ。妻こふる。きゞすの聲と。

子をおもふ。雲雀のこゑと。くらぶれば。いづれかふしき。
妻はもよ。とにもまきえむ。子らはもよ。うるよしもふし。
そこゆゑに。雲雀のこゑの。かふしくもあるか。

反歌

妻こふるきゞすはあれど子をおもふ野邊の雲雀の聲ぞかふしき。

蜂　久米幹文

はちといふ。名はひとしきも。さまざまに。志ふこそかはれ。
とらふに。身をかざらひて。もろつばさ。つるぎ羽きらし。
志がこゑを。ふゝとふりたて。ひもがたな。志やしりにこめて。
たむかへる。人さすもあり。春秋に。ときとときつく。
百花の。露をあつめ。うま酒を。かみつゝのみて。

うからやから。うたひまひつゝ。かたみに。志ひふくもあり。
こしぼその。すがたながらも。こゝろさへ。身さへくろめて。
さゝがにの。蜘らとりつゝ。子ふらぬは。にくしおそろし。
ふべて世は。我子にふれと。のろひつゝ。子つくるもあり。
はふむしの。はかふきだにも。かくさまに。ありけるものを。
よろづに。すぐれし御魂。いふたきに。來すめる人の。
うべしこそ。よきもあしきも。かぎり志られぬ。

詠鷹歌並反歌　本居豐穎

朝雲に。羽うちかはし。千里ゆく。葦鶴はあれど。
かひふらす。手にはすゑがたし。ゆふけたく。軒端にかへり。
うつくしき。家鳩はあれど。をとりとる。わざだに志らず。

はしけやし。わがはしだかは。をゝしき。心はもてど。
とぐらゆひ。すうればなれぬ。ふる雪の。さむき大野の。
朝がりに。鳥ふみたてゝ。あはすれば。空ゆ飛びかけり。
追ひぬらふ。鳥はゆるさず。ほゝといひて。わがよぶまにま。
かやすくも。おちかへるかも。あふたのし。あふめぐしもよ。
うべしこそ。はしと名におへれ。いざ子ども。あえふならはふ。
この鳥の。たけきすゝみに。はしきそのさがに。

反歌

夜もすがら肌あたゝめてはふちやる鳥はおはずといふがむかしさ。

月前蝙蝠　故福住正兄

諸鳥は。ねぐらをもとめ。小雀も。巣にかへりゆく。

ゆふまぐれ。ひとり飛びいで。かはほりの。鳥ふき里と。
とびあがり。飛びくだりつゝ。出こめける。おもわもはぢず。
きたふけき。つばさひらきて。空たかく。ほこらひをるよ。
出かあれど。月にあそぶは。われとちと。おなどかりけり。
そこもへば。にくゝしもあらず。よそめには。我もかやつと。
おふどくや見えむ。

澗底鹿　故僧辨玉

松の風流るゝ水の。をちこちに。聲かはしつゝ。
なけばふく。よはのさをしか。こふたふる。聲のさかれば。
かふたふる。聲もかそけく。ともどもに。遠くぞふれる。
あくがるゝ。心まどひに。わがこふる。妻やこたふと。

山びこの。ひゞきのまにま。谷蔭に。深くやいれる。
わけやまどへる。

○哀傷

權田年助が七年の靈祭に春に寄する懷舊といふことをよめる歌

落合直亮

花は根に。かへると聞けど。春くれば。またもさきけり。
鳥は巣に。かへるものから。時くれば。いでゝふくふり。
異竹の。世にかふしきは。ゆく水の。またはかへらぬ。
ふき人の。魂のゆくへか。人はあれど。友はあれども。
權田とふ。氏のぬしをし。むつましき。友とたのみて。
荒磯ふみ。ありにしものを。花鳥の。それにはあらで。

ふる雪の。きえうするごと。照る月の。雲かくるごと。
かへりこぬ。道にいにきと。風の音の。遠音にきゝて。
あけくれに。春秋かけて。去ぬびつゝ。ありけるほどに。
七年に。今はふりぬと。靈まつり。わざものすとか。
今さらに。きくもかなしく。咲く花の。色につきつゝ。
鳴く鳥の。聲につきつゝ。去るしふく。かこたるゝかな。
あはれうき世と。

從二位池田慶德卿薨去之時作歌　本居豐穎

隅田川。そひの里わの。花園の。垣根とよもし。
松むしも。露にこそふけ。薄霧の。まがきにたてる。
なずゝきも。袖うちふりて。朝なゆふふ。うちこそまねげ。

ふにしかも。君はかへらぬ。志ろたへの。みけしよそひて。
舟路より。御輿はてぬと。もろびとは。いひさわげども。
ありし世の。すがたも見えず。ことゝはず。聲もきこえず。
松むしの。まつかひをなみ。まねぎつる。袖うちくだし。
人みふの。音に泣く涙。花園の。露より志げみ。
ふげきの。霧さへはれず。たちわかれ。因幡の山の。
山松の。もたる千歳も。たがために。祭るちとせぞ。
毛田の崎。住むとふ鶴の。ふがき世も。たがためをしむ。
そのさきの。ふみなみふらず。いふば山。たかきいさをも。
君ぞたてたる。

○旅行

明治八年三月妻子を携へて箱根山を越ゆる時
よめる　久米幹文

都にて。思ひしだにも。かなしけく。ともしき山の。
はこね山。ふたご山。わかくさの。妻をたぐひ。
かこじもの。ひとり子をぬて。草まくら。旅寢のそらに。
ふりさけて。まさめに見れば。青雲を。ひたひによそひ。
白雲を。腰にまとひて。いづれとも。わくかたもなに。
いよゝふほ。かふしき山の。箱根山。二兒山。

明治十三年村田清昌等と常陸めぐりすとて
よめる歌　落合直澄

やすみ志し。わが大君の。志きませる。京をいでゝ。

利根川を。川さかのぼり。まくらがの。古河をすぎ。
をとめ子が。つくてをすぎ。荒野らを。新治すぎ。
土浦も。船乗すれば。筑波嶺は。霞にこもり。
富士のねは。み空にそゝり。岡べには。櫻花さき。
野べには。菜の花さかも。こち見れば。大船はしり。
をち見れば。小船こぎいづ。志らさぎは。葦間にあさり。
あぢかもは。浪にあそべり。そこをしも。あやにうれしみ。
草まくら。旅なる我も。家はすれ。今日をくらしつ。
西の浦。霞のうらは。いひもえず。名づけも志らに。
よき浦の。めでたき海ぞ。これの浦わは。

有馬より六甲山を越えける時よめる

ありま山。麓をいでゝ。舟坂の。里わをすぎ。　久米幹文
むこ山を。たゞこえくれば。雲の間に。こやの池見え。
あしもとに。かぶと山たち。沖邊には。白波さわぐ。
うみやまの。さやけき見れば。草まくら。旅はくるしき。
ものゝしもふし。

大坂より蒸氣車に乗りて神戸に至りてよめる

久米幹文

虎こそは。荒野をはしれ。鳥こそは。みそらをかけれ。
湯のけもて。はしる車は。虎よりも。とくこそゆけ。
鳥よりも。とくこそとべと。世の人の。いひはやせれば。

草まくら。旅のつかれを。やすめむと。我うちのりて。
津のくにの。國のまほらを。たゞわたり。わがわたれば。
目のまへに。海はきより。たちまちに。山はうつりて。
いやとほき。道とも志らず。われとわが。もくもおぼえず。
時の間に。神戸のさとに。めぐりつき。かへりみすれば。
いでゝこし。難波わたりは。雲にかくれぬ。

○名所

二荒山の奥ふる温泉を見てよめる歌

小中村清矩

真木のたつ。荒山中は。鶯こそは。うらふくときけ。
志ゝこそは。むれたつといへ。たまくしげ。二荒の山の。

奥山の。山のおくかは。こゝろもでの。高屋たちふみ。
鳴く鳥の。聲もきこえず。をちこちの。人らつごひて。
たつ志ゝの。からとも見えず。たくひれの。白根が嶽ハ。
やどりや。たゞにむかひて。天雲に。そゝりたゝせり。
その山の。下邊のうみは。あやしくも。ふれるうみかも。
くすしくも。わきいづるみ湯か。さゞれ波。よする岸邊に。
けふりたち。湯氣わきかへり。またまふし。たちのぼる底を。
あさぢ原。つばらにみれば。かしこさに。こゝろもきえぬ。
その湯より。いくだもあらず。岩垣の。へだてもふくて。
水草おひ。のどに流れて。すゑつひに。岩根をおつる。
真清水に。魚は鰭ふり。葦間には。鴨ぞ鳴くふる。
そのみ湯を。麺にひきわたし。朝夕に。あみてそゝぎて。

もろ人の。病もいえぬ。うべしこそ。あら山中も。
ちまたとは。ふりにけらしも。くすはしく。そこにおもへば。
この山を。うしはく神の。神はかり。はかりふしけむ。
いでゆふらまし。

詠阿波國忌部郷故事歌　小杉榲邨

都邊は。衣がへして。きのふかも。ちりにし花の。
その色の。ふごりや志のぶ。この里は。神のみけしの。
あらたへの。そのたぐつ布。織りふして。つかへまつりし。
いにしへよ。今のをつゝに。つたへこし。忌部がともの。
氏人の。その中にしも。みそ人と。いひつぎ來にし。
伴のをが。いむれつどひて。神まつる。今日のうつきに。

まつらむと。こそのみ冬よ。かちとりて。つくる白木綿。
ま志ら木綿。眞白和幣の。志らにぎて。いはひきよめて。
神御衣に。織りてぞまつる。おふなおふふ。時はたがへじ。
八重花の。咲きてにほひし。丸重の。都にとほき。
櫻麻の。をゝの郡の。これのさとべも。

反歌

あさゆふのいとふみ志げくおりふしゝ御衣たちかふる頃はきにけり。

常陸國大洗磯前にてよめる　久米幹文

わたつみは。あやしきものか。青海原。みそらひたして。
あしたには。潮をみたしめ。ゆふべには。潮をひしむ。
潮干の。磯のさきざき。わかめかり。ひぢきもをかり。

貝ひろひ。鮑かつぐと。あまの子は。さへづりかはし。
鳥さへに。みだれさわぎぬ。潮滿てば。千里の沖や。
時つかせ。雲居にいぶき。五百重波。千重波よせて。
山ふせる。岩をうちこえ。やふ花と。たきちさきちり。
地震とふり。雷ととゞろく。この磯の。ふからましかば。
大つちは。くゐはてなむを。この國は。ふがれうせむを。
千引岩。立てめぐらして。やすくにと。國つくらしゝ。
二ばしら。わが大神は。たふときろかも。

觀富嶽作歌

小杉榲邨

ひむがしの。京の西に。天そゝり。高くたふとく。
ひさかたの。みそらにそゝる。富士の嶺を。ふりさけ見れば。

雪のきぬ。とりよそほひ。雲のひれ。かけふびかせて。
ふきいます。國いやひろに。ふづめます。神いやひさに。
この國の。ふづめとふりて。雄々しくも。うごかぬすがた。
とこしへに。いとも尊づけし。たゝふはる。そのむら山は。
立ちつゞく。霞のころも。花の袖。みどりにあけに。
ふふじふの。臣とまつろひ。富士のねを。君とぬやまひ。
七重八重。めぐりかくみて。神の代よ。今のをつゝに。
うごきふき。わが大君の。高みくら。をろがむふせり。
山だにも。君と臣との。ふなことに。ふかぞまつろふ。
うべふうべふ。わが日本を。うまびとの。國とはいひけむ。
からくに人も。

熱海の湯あみに行きける時よめる

故日下田足穂

あづさゆみ。伊豆の熱海は。かげともに。五百重浪より。
そともに。八重山たちて。海山の。まぐはしきかも。
夏の日の。熱海のさとゆ。晝三たび。夜はた三たび。
わきいづる。湯の音きけば。ふるかみの。今かおつると。
地震ふりの。ふりやくづすと。その音の。聞のかしこく。
そのゆげの。見のおそろしく。いくくすり。くしきこの湯は。
天の下に。たぐひなしとふ。かくしあれば。下樋をふせて。
家ごとに。ひきわかちぬる。この里の。賑ふ見れば。
うちひさす。都のひとも。志なさかる。鄙のをの子も。
來つどひて。湯あみぞすふる。やみびとの。病愈ゆらむ。

そのゆげの。さめぬるがごと。消えぬるがごと。

反歌

海山のとみさかえたる熱海がたいやさかえむと湯さへわくらむ。

那智瀧歌

本居豐穎

志ら玉を。氷雨とふらせ。くらおがみ。みそらやかける。
天雲を。ほろにふみさきて。はたゝかみ。落ちやくだると。
岩がねに。たつ足志ゞみ。魂もとびて。あまがける。
三熊野の。熊野の那智の。大瀧あはれ。

反歌

旅衣ひも吹きはなつ山風に岩もとゆすり雨きほふふり。

明治二十年四月一日陪從二位蜂須賀侯爵觀

鳴門作歌

小杉榲邨

葦原の。瑞穗の國の。なりなりし。そのはじめとふ。
御食むかふ。淡路の島。さしふみの。粟の國と。
こちごちの。眞中の水門は。かけまくも。あやにかしこし。
いはまくも。くすしかりける。いにしへに。妹のみことを。
吉ぬびかね。うらこひまして。伊邪那伎の。神のみことの。
はろばろに。黄泉つさかひに。いでたゝし。見ぎいましつゝ。
大御言。ともにかたらひ。吉かすがに。ありえまさねば。
たちわかれ。かへりたまひて。吾はもよ。吉こめき國に。
ありけりと。おもほしめして。大みまの。はらひせさすと。
大神の。こゝにきまして。みそなはし。いともはやしと。

のりごちし。のりのまにまに。今もふほ。いや潮はやみ。
船人の。かしこむ水門ぞ。あしたには。筑紫にいたり。
ゆふべには。紀のみさきに。ひる潮の。ひきのまにまに。
みちぢほの。みちのまにまに。海のそこ。とよもす音は。
千よろづの。鳴神のごと。そのふみの。うづまくさまは。
吉まゞまを。まきかゝのむ。まさめには。見のおそろしく。
そばめにも。見のかしこしや。吉かれども。春日にふれば。
のどけみと。馴れ來しわざか。沖つべに。里のあまらが。
鯛つると。小舟きそへり。めかりすと。邊つべにつどふ。
そを見むと。みやびの徒は。あをくさの。小草ふみふらし。
松たてる。うふびの山の。このやまの。尾ごし岩こし。
のぼりたち。見つゝたのしみ。くだりたち。磯菜をあさり。

ひねもすに。　來つゝ遊びて。　かたりつぎ。　いひつぎ來らく。
そこゆゑに。　わが殿の君。　むかしべな。　おもほしいづと。
御こゝろを。　慰めますと。　はるばるに。　けふいでたゝし。
みとも人。　つかへまつりて。　衣笠に。　松をおほはせ。
絹垣に。　いすみをゆひ。　みさずきに。　草ふみおこし。
みはるかし。　鯛にわかめに。　とりどりに。　酒うたげして。
志ほあひの。　ひるまのごかに。　あそびせす。　今日をたふとみ。
わが君の。　世のみさかえを。　里人も。　ほぎとよもし。
浦人も。　たゝへまつらむ。　この水門に。　鳴る潮のごと。
みつ志ほのごと。

○雜歌

自由といふことを人のよませけるによめる　故日下田足穂

春の野に。　きなくうぐひす。　秋の田に。　羽かく志ぎ。
志ろがねの。　籠にかはるとも。　こがねの。　籠にかはるとも。
尾をせばめ。　翅たわめて。　うつし世に。　ありへむよりは。
春の野に。　さやることふく。　秋の田に。　物おもひふく。
飛びかけり。　ともむつれして。　あさる志は。　あさりえがてに。
たまきはる。　命志ぬとも。　おのが志し。　こゝろのまゝに。
世をへふば。　たぬしとやふく。　うぐひすと志ぎと。

雪消松綠　故日下田足穂

明けくれば。　朝日たゞさし。　暮れゆけば。　夕月のぼる。

高砂の。尾上にたてる。ひとつまつ。ひとつ松あはれ。
その松に。七さか八尺。ふりつみし。雪にはあれど。
春たちて。消えゆくまゝに。野邊には。桃の花さき。
尾上には。櫻咲きけり。桃ふらば。色にやいでむ。
花ふらば。香にやにほはむ。ちかしあれど。にほひはめでじ。
かくしあれど。色はおもはじ。ここしへに。みどりいろこき。
ひとつ松あはれ。

憩花鳥茶屋一見馴飼籠中大小諸鳥而作歌　故　僧　辨　玉

うらうらと。のどけき春も。花鳥の。花にも鳴かず。
籠にかはれ。いぶせかれども。天ゆかば。大鳥とらむ。

地ゆかば。毛物はみふむ。あやうかる。ことをおもへば。
山鳥も。尾上へだてず。まなばしら。尾ゆきあへ。
白羽鶴。羽うちかはし。わがはねに。風は吹くとも。
汝が羽に。風はあてじと。めをむつび。夜もふすらむ。
うづら鳥。はひかゞむとも。庭すゞめ。うづくまるとも。
にはつ鳥。翔らずとても。うらやみて。雲ゆふこひそ。
雲雀ふす。おもひあがりて。世の中に。たちてつまづく。
人しおほしも。

人力車夫　故　僧　辨　玉

大路ゆく。人にやとはえ。ひきとひく。ちから車の。
七くるま。數かさぬれど。あさよひの。けぶりの志ろに。

ここごこに。　數へあつれば。　かなしかる。　おいの父母。
いとほしき。　吾妻子らの。　あすの日を。　過さむまけも。
かりてひく。　車のあたひ。　かりてすむ。　家のあたひの。
今日の日の。　去ろにふさむと。　かすゆ酒。　すゝりもかねて。
汗あえて。　息づきあへぐ。　いたづきを。　つらつら思へば。
ゆくさくさ。　轍をぬぐひ。　軸にさす。　油もれのが。
身の油ふる。

庭に露のおけるを見てよめる　故　日下田足穂

庭のおもの。　葉廣がしはの。　葉もたわに。　おきわたしたる。
たそがれの。　露をし見れば。　ほづえに。　おきたる露は。

中つえに。　おちふらばへ。　中つ枝に。　おきたるつゆは。
去づえに。　おちふらばへ。　去づえに。　おきあまる露は。
庭のおもに。　おちうるほひて。　かしは木の。　木のしたかげは。
夕去めりせり。

過横濱異人館作歌　故　僧　辨　玉

武藏の海。　横濱の津は。　まぬきぬる。　異國人の。
わけてすむ。　町も八十町。　八ちまたに。　つゞく高屋の。
庭ひろき。　厨を見れば。　ぬの子は。　かきつにはふち。
牛　は。　梳うちつふぎ。　庭鳥は。　伏籠にかへり。
生　膚を。　斷ちて烹らゆか。　さかはぎに。　剝ぎて燒かゆか。
朝ふのあへ。　夕げのまけに。　去か親を。　とらくを去らに。

ちか子を。　とらくをちらに。　あそばひをるよ。　鳥もけものも。

川上竹子者語余曰岩龜樓遊女喜遊者性與洋客不肯同枕席焉雖然自顧與身也詠歌一首而絶命矣真可憐之者也因相俱作歌　故僧　辨玉

勝牡鹿の。　真間の手兒名。　葦の屋の。　うふぬ處女が。
よりきそひ。　妻ごひするを。　いぶせみと。　いとへる時に。
身うせにし。　たぐひはあれど。　さらにいま。　ありけることを。
聞けばまた。　ましてかふしふ。　月草の。　うつるふらひを。
ぬけいでゝ。　咲く女郎花。　色こそは。　あたにほへれ。
さまこそは。　たはれて見ゆれ。　うるはしき。　こゝろおきてに。
とつくにの。　人のめでには。　をられじと。　そむきあらそひ。

なびかじと。　いひすまへれど。　つれもなく。　さそへる風に。
せむすべの。　たづきをちらず。　剣太刀。　身をしもさして。
おくつゆと。　命消えけむ。　河竹の。　ふがれにちづみ。
世の中の。　うき瀬すくひし。　親はなほ。　ふがらへぬるか。
ゆくすゑを。　たのみ契れる。　夫はまた。　あらずありしか。
夫あらば。　いかにちぬばむ。　親あらば。　いかに歎かむ。
いのちにも。　かへぬみさをは。　うなぬ處女。　手兒名がともに。
おくれざるらむ。

爭春秋　村上忠順

つゆちもの。　秋しきぬれば。　常世より。　雁は來ふきぬ。
あをかりし。　木々はもみぢぬ。　ちかはあれど。　たぬしくもあらず。

鴈がねは。ふくねかふしみ。小夜中に。おきてぞなげく。
もみぢつる。木々はにほへど。露霜に。袖ぞひぢぬる。
あづさゆみ。春さりくれば。梅が枝に。鶯きふき。
さくら花。のどかににほひ。見るものは。たぬしくおぼえ。
聞くものは。こゝろゆきけり。雪の中に。咲くだにあるを。
梅の花。春くとつげて。花といふ。花にさきだち。
いちはやく。咲くぞめでたき。うぐひすは。年たちかへる。
あしたより。日にけに鳴きて。おもしろき。聲にしあれば。
聞くまゝに。こゝろたぬしも。さくらはも。春たつ日より。
小指をり。日數かぞへて。咲くを待ち。かつさきぬれば。
雨風を。いとひうらみて。ものくるふ。人かとばかり。
まごゝろを。空にはふらず。かくばかり。めでたき花は。

ことくにゝ。咲き匂はめや。うぐひすも。鳴くことはすれど。
わがくにの。聲に出かめや。うぐひすと。さくらの花は。
みくにの。いみじきたから。こともの は。さもあらばあれ。
花鳥の。色音めでたき。春山われは。

望新築馬車道作歌　故僧　辨玉

はやまぢの。神奈川かたの。横濱や。驛にめぐる。
こちごちの。坂路をよきて。たゞむかふ。海つ路ひろく。
くるまひく。馬つからさず。かゝはさむ。道つくらせり。
うちわたす。汐路はかりて。沖さかり。堰樋(ふぐひ)をうたし。
邊つきて。まぐひをうたし。まぐひは。出るたへの旗。
ぬぐひは。てるたへの旗。海中の。出るしにたてゝ。

つかさ人。　まけのまにまた。　ことごとりて。　おきてなすらむ。
天とぶや。　鳶と名におひ。　あらがねの。　土方とよぶ。
奴等は。　身もたなしらず。　磯山の。　志み木かりとり。
岡山の。　大木たちきり。　木の根より。　ねりその綱を。
千尋たれ。　八千すぢかけて。　ましらふす。　いとり傳ひて。
飛ぶ鳶の。　高くのぼらひ。　たにくゝの。　くまわさわたり。
胸鋤の。　つきたつかぎり。　手ふすきの。　及ばむきはみ。
五百磐村。　八百にはらゝけ。　荷ひ木も。　とをゝにかきて。
浪をせき。　潮をおとして。　さゝがにの。　蛛手にわたす。
かけはしを。　こふたにこえ。　うちはしを。　かふたにわたり。
わきいづる。　杵木の蟻の。　よみもえず。　數へも志らに。
千枝にたれ。　五百枝にわかれ。　つらよみて。　もきかへるごと。

絶間ふく。　もとほれるごと。　燒鎌の。　戸部の小山の。
山つゞら。　くるやくるやに。　きゞしふく。　野毛の小川の。
河舟の。　もそろもそろに。　たゆみふく。　堀りうがちてや。
いとまふく。　築き作ればや。　今朝みつる。　渚の水脉は。
ゆふべには。　小島にふれる。　きのふみし。　山はくづして。
今日みれば。　直路になれる。　あさゆふに。　志かいそしみて。
日ふらべて。　かくいたづけば。　荒潮の。　たゝへし淵も。
荒浪の。　くだけし峰も。　ほごもふく。　大道とふらむ。
今よりは。　崖路あへがず。　たひらけく。　安くかよへば。
鞭うたず。　馬ははしらむ。　きしみふく。　車はゆかむ。
かずふらぬ。　毛物のうへも。　かしこきや。　たえずいたれる。
御代のめぐみか。

巖

落ちたぎち。　くだる浪間に。　さしいづる。　み谷の巖。
おのづから。　枝さし出げく。　ひとつ松。　うづにさすふし。
さるをかせ。　かつらとかゝり。　年をへて。　かさなる苔に。
ふかみどり。　むつのくらぬの。　ころもきにけり。

故僧　辨玉

風

時ぞくに。　吹きちらせれば。　あだとしも。　うらみらるれど。
ちらせれば。　ちらすまにまに。　さそへれば。　さそふまにまに。
花もみぢ。　むつれまつはり。　目に見えぬ。　風のすがたを。
出ろたへに。　ふしてぞふびく。　くれなぬに。　染みてぞ見する。

故僧　辨玉

ふきちらし。　つれなき風や。　おもふどちふる。

題美人彈琴圖

福住正兄

あをやぎの。　たわやゝく枝に。　さくら花。　咲きにほはせて。
梅が香を。　かをらせしごと。　望月の。　足れる面わの。
腰ぼその。　すかる少女の。　出どけなく。　ふくだみし髪。
あざれたる。　袿（うちき）のすがた。　たまだれの。　小琴まさぐり。
ひとふしを。　つゞしるけはひ。　とりどりに。　見のふつかしく。
ことごとに。　見のうるはしく。　そのころも。　聞ゆるがごと。
その琴も。　音あるがごと。　きもむかふ。　わがこゝろさへ。
こゝろふらずも。

妓

飯田武郷

うかれても。あらましものを。たはれても。あらましものを。
あひも見ぬ。人にたぐひて。よひよひに。まくらかはせば。
世の中の。うけくつらけく。われにます。人はあらじと。
なげくその。心ときだち。おもふその。こゝろもゆれば。
何しかも。うかれあそばむ。なにしかも。たはれくるはむ。
うたてこの。をそのたはれ男。ふかふかに。かふしさそふる。
つまどこそふれ。

夢中旅

久米幹文

國もせに。長路をつくり。そのみちに。くろがねをたき。
湯のけもて。はしらす車。それよりも。あやしきものは。
夜どのゝ。夢のたましひ。時の間に。千里をすぎ。
いやたかき。峯にのぼれば。これやこの。吾妻はやと。
いにしへの。皇子のみことの。ふげかしゝ。碓日のみ坂。
今ひとへ。山をこゆれば。諏訪の海は。かゞみのごとく。
富士のねは。小山なしたり。またさらに。山路にいれば。
かけはしは。雲居にわたし。谷川は。岩波たぎつ。
ゆけどゆけど。足もつかれず。見れどみれど。目さへあかれば。
かくながら。吾世はへふむと。おもほゆるはや。

觀熊野海獵鯢作歌

本居豐穎

真熊野の。熊野の浦の。うらびとの。いむれきほひて。
いさふとる。よそひいそしも。くぢらつく。てぶりをゝしも。

吹く貝に。七里きほひ。うつつゞみ。七浦とよむ。
あま小舟。こぎのすゝみに。奥つ藻の。鉾とふ鉾は。
雨とふり。ふゞきとみだる。その魚の。いぶく志ほげは。
霧とたち。霞とかをる。あづさゆみ。八上のさくら。
散りぬとし。何をし見けむ。雲とりの。志こ山紅葉。
過ぎぬとし。何歎きけむ。白波は。花とさきちり。
さにぬりの。千舟百舟。沖にへに。紅葉とうけり。
目もあやにして。

捨子

飯田武郷

富人の。家の子どもは。きぬわたに。あくとこそいへ。
うま人の。家の妻らは。あまたにも。子をおほすてふ。

うつせみの。世はおなじきを。かくばかり。悲しきものか。
はくゝまむ。神だにあらず。ひたすべき。乳母もふくて。
あしたには。さむさにこゞえ。ゆふべには。飢にさけびぬ。
よしやよし。親のこゝろと。たまぼこの。大路にすてゝ。
ひろはれむ。身とーふりなば。なかふかに。やすからましと。
にはたつみ。ながるゝ涙。おち志ひの。志ひておさへて。
いたきゆく。ものとも志らず。ゑみまくる。乳児のおもわの。
すべもすべふき。

明治十年八月二十一日上野公園にて博覧會開業式
行はせ給ひし夜不忍池にて花火といふものあぐる
を見て思ひつゞけゝる歌　本居豊穎

かぎろひの。もゆる火の色に。蓮こそは。花はさくとへ。
蓮の葉の。うへにみだれて。露こそは。玉とちるとへ。
蓮　咲　く。池のみぎはゆ。大そらに。あぐるかぎろひ。
花とさき。玉とちるふべに。もろ人の。ほむるその聲。
天にみち。地にとよめり。そのかみを。去のぶの岡に。
おひをゝる。千本の並木。つらつらに。思ひかへせば。
ちはや人。こゝにいりこもり。みいくさに。手むかひしとき。
大　筒　に。小筒うちそへし。その火や。かくはもえける。
その玉や。かくはちりける。里　人　か。逃げまどふ聲は。
天　地　に。かくやとよみし。そのみだれ。今はむかしと。
をさまれる。この大御代は。花とちり。玉と飛ぶ火を。
さと人も。見めでよろこび。もろ人も。あふぎたのしみ。

ゐらゐらに。さかみづきせり。うべふうべな。これの足御代。
さく花の。さかりにひらけ。去らたまの。いてりかゞやく。
天地のうちに。

山靜如太古

あげまきを。いざふひたてゝ。かの峰の。ま去ばかりつみ。
ふみ巻を。かたへにおきて。この岡の。鶴にともふひ。
山　人　の。つくれる酒を。やまびゝと。ともにのみつゝ。
おもふこと。あらぬこの身は。あくるより。暮れわたるまで。
大　船　の。心もたかに。春の日の。のどけくしあれば。
うつりゆく。世もおもほえず。人ことの。去げきも去らず。
おほなむち。すくふ御神の。いにしへに。ありきといふふる。

飯田武郷

わだの外と。　この志まも。　かくこそあるらし。

村夜

久米幹文

あかねさす。　ひるはひねもす。　をとこらは。　畑うちくらし。
をとめらは。　田にたちつかれ。　すみぞめの。　夕ぐれふかく。
おのもおのも。　まけ庵にいりて。　かてめしを。　かつくらひつゝ。
ぬばたまの。　夜のひと時。　いきつきて。　やすめるときに。
うちとけて。　ぬねふるはしに。　さとをさが。　志もとをとりて。
門たゝき。　のゝしる聞けば。　いましらが。　つくるその田の。
ちからをば。　忘れぬべしや。　このごろに。　をさめずしあらば。
このすめる。　家もところも。　飯かしく。　かふへもふべも。
うり志ろなし。　めさけられなむ。　おろかふる。　おほみたからや。

かしこかる。　國のおきてを。　志らずてや。　世にはあるらむ。
つかへずて。　かふふべしやは。　をさふきものは。
はやく世に。　まふばしめつゝ。　こどわりを。　さどらしめよと。
いふものを。　おその翁や。　おそのおきふや。

訓育院

飯田武郷

父　母　の。　おもてもわかず。　はらからの。　聲のみきゝて。
をさな子の。　うまれしまゝに。　おのづから。　見えぬその目を。
あきらけく。　てらすがごとく。　おろおろに。　さとしみちびき。
うつせみの。　世の人ふみに。　わたらはむ。　こどわり志るも。
ことわりに。　すぎてあやしと。　みふ人の。　おごろくをしへ。
これもまた。　あきらけき世の。　ひかりふらずや。

養蠶

桑原の。里の新桑。みづ枝さし。蔭もとをゝに。
志げりあふ。若葉よろしと。志が父は。かりつみほこり。
負ひかへる。かたまをおもみ。待ちとりて。露うちはらひ。
ほごほどの。筒に盛りわけて。志が母は。小屋にはこべり。
きのふけふ。ひたやごもりの。ふづかしき。そのまゆ刀自女。
手もすまに。えびらの上に。すがやかに。桑ときたれて。
夏ひきの。糸ひきまゆの。こがひすと。いそはくタ。
志かれこそ。わがせの君。垣ごしに。わが手ふとりそ。
いはふその。こがひのわざぞ。かしこしと。いさめわぶめれ。
こやのゆふべを。

小杉榲邨

観相撲戯作歌

それの嶽と。名におひ。それの海と。名をばたゝへて。
われこそは。世のますらを。あれこそは。國のたけをと。
ところせく。ほこらひをれど。手ちからは。すべふきものか。
むかもゝに。堅庭ふみ。手ふひぢに。汗かきたりて。
おそぶらひ。うてどなびかず。ひこづらひ。とれどもよらず。
おふふおふふ。立ち向ひあれど。逢坂の。關の岩かど。
動かずありけり。東とあぐる。あふきの。風たかみ。
西のうみべは。たつ足もふし。

本居豊穎

月は老の友

久米幹文

あしびきの。山にしすむと。皮ごろも。夏冬かたまけて。
かはほりの。扇はふたぢず。岩が根に。齢をたぐひ。
雲居に。こゝろをやりて。いやたかに。思ひあがれば。
神代より。名におひきつる。秋津島。やまとの國は。
月もはた。すみよき所と。年のはに。いやてりまさり。
ここしへに。おもかはらねば。こゝろあひの。友とたのみて。
かぎりなく。年へにけるを。うつせみの。世の人みふは。
雲霧の。はれみくもりみ。さだめふく。みちかけしつと。
おほゝしく。思ひつゝかあらむ。こひつゝかあらむ。

題高山操志歌並反歌　小中村清矩

たか山の。高きこゝろを。うつせみの。世人志らめや。

人みふの。いかにいふとも。よしゑやし。命志ぬとも
このこゝろ。あにかへめやも。天地に。いたれるいさを。
いきのをに。たてずはやまじと。とこゝろに。おもひし君よ。
志らぬひの。筑紫の海に。立つ浪の。跡ふきがごと。
あらたまの。年はへぬれど。いきのをに。思ひしことは。
たまちはふ。神あひうづふひ。春花の。匂ふがごとく。
大御世の。むかしにかへる。みさかえを。今のうつゝに。
天がけり。うれしと君は。見つゝあらむ。

反歌

大みかどはろにをろがみて草ふしのをしまぬ身にや月はてりけむ。

詠人道歌并短歌　福羽美静

たふときは。　人にぞありける。　うれしきは。　人にぞありける。
あしびきの。　山邊をみれば。　かさふりて。　草木ぞげれり。
ぞげりあふ。　草木のみかは。　ぞろがねも。　こがねも玉も。
その中に。　籠りてありけり。　その山を。　うがつも人よ。
その草木。　つかふも人よ。　さればこそ。　人てふものは。
世の中の。　ものゝ中にて。　こゝさらに。　たふとかりけれ。
いかふれば。　人てふものを。　かくばかり。　たふときものと。
天　地　の。　神のさだめて。　世の中に。　つくりましけむ。
そこをしも。　思ひまはせば。　人ばかり。　ふすべき業の。
世の中に。　重きはあらじ。　世の中に。　多きはあらじ。
その人の。　すめるところも。　その人の。　すめるがまゝに。
その村を。　田舍とよばせ。　その里を。　みやことよばせ。

その人の。　おこなふことの。　よしあしの。　わかちによりて。
その國を。　よしとほめさせ。　その國を。　あしとそしらせ。
それのみか。　すめるその世を。　よき世とも。　あしかる世とも。
それそれに。　よばするものは。　世の中の。　人にありけり。
天　地　の。　寶をとりて。　世の中の。　うまきを喰ひて。
人はこれ。　ものゝ中にて。　世の中の。　たふときものと。
ほこりかに。　いひをるをのこ。　世の中の。　人の道には。
あらじとを云れ。

反　歌

世の中にうまれし人よこゝろせよ世のよしあしは人ぞうみける。

編者いはく、あのをはりの一首い、教訓の部に入るべきものなれども、既に印刷ふをへたる後に得たれば、不順序ながら、姑くあゝにをさめおくなり。そは不日、再版のときに正して

む。看む人そのあゝろしてよ。

新撰長歌集終

今様集

岸本宗道
大宮宗司 編

菊園舎蔵版

今様の變遷

今様は、郢曲の一にして、中古の時代におこりたる、一種の韻文ふり。今様とは、その頃、新に詠み出でたるをもて、催馬樂、風俗、朗詠ふどに比べて、今めかしといふ義ふり。さて、そのはじめは、字句さだまりなく、たゞ、隨意にうたひたれども、年經るがまゝ、四句の調にさだまり、後白河天皇のころより、さかりにおこなはれて、遊宴の一興とふれり。されど

も、鎌倉時代を過ぎてよりは、世にすたれぬ。かくて、徳川氏の世にいたりて、文學の極盛と共に、二三の人はつくりたれども、その勢力、至りて微弱ふりしふり。

今様集

若菜

園生の梅のにほひ風に。　菅原道真
門田の雪もむらきえて。　わがすむ山も春めきぬ。
若菜摘むべく野はなりぬ。

色波

色ばにほへど散りぬるを。　弘法大師
うゐの奥山今日越えて。　わが世たれぞ常ならむ。
あさき夢見しゑひもせず。

法華經

像法轉じては。　乙前
藥師のちかひぞたのもしき。

一たび御名を聞く人は。　よろづの病ふしとぞいふ。

佛身　作者不詳

次第聲聞きいかばかり。　よろこび身よりも餘るらむ。
吾等は來世の佛ぞと。　たしかに聞きつる今日ふれば。

若王子　作者不詳

熊野の權現は。　名草の濱にぞおりたまふ。
和歌の浦にしましませば。　年はゆけども若王子。

千手の誓　作者不詳

萬の佛の願よりも。　千手の誓ぞたのもしき。

枯れたる草木もたちまちに。　花咲き實なるとぞ問ひたまふ。

春　作者不詳

春のはじめの梅の花。　喜び開けて實ふるとか。
みたらし河の薄氷。　心解けたる只今かな。

梅枝　作者不詳

松の木かげに立ちよれば。　千歳のみどりぞ身に染めども。
梅が枝挿頭に刺しつれば。　春の雪こそ降りかゝれ。

極樂　金峰山巫女

十萬億の國には。　海山へだて遠けれど。

心の道だにふほければ。　つとめて至るとこそ聞け。

老行　神崎遊女

我等は何しに老いにけむ。　思へばいとこそあはれふれ。
今は西方極樂の。　彌陀のちかひを念ずべし。

初見　佛御前

君をはじめて見る時は。　千代も經ぬべし姫小松。
御前の池ふる龜岡に。　鶴こそ群れゐて遊ぶふれ。

蓬萊山　祇王

蓬萊山には千歳ふる。　萬歳千秋かさふれり。

松の枝には鶴巣くひ。　巖の上には龜あそぶ。

凡夫　同

佛もむかしは凡夫ふり。　我等もつひには佛なり。
三身佛性具しふがら。　隔つる心のうたてさよ。

手枕　同

君があけ來し手まくらの。　絶えて久しくふりにけり。
何しに隙なくむつれけむ。　ふがらへもせぬものゆゑに。

權現舟　康頼入道

白露は月のひかりにて。　黄土うるほす化あり。

權現舟に棹さして。向の岸によするなみ。

舞　容　　同

樣も心もかはるかふ。落つるふみだは瀧の水。
妙法蓮華池とふる。弘誓の舟に棹さして。
沈む我等を乘せたまへ。

法　樂　　性照法師

佛の方便ふりければ。神祇の威光たのもしや。
ひかへば必ず響あり。おさへば定めて花ぞ咲く。

燈　籠　　作者不詳

心の闇のふかきをば。燈籠の火こそ照すふれ。
彌陀の誓ひをたのむ身は。照さぬ所ふかりけり。

舊都の月　　左大臣實定卿

ふるき都を來て見れば。淺茅が原とぞなりにける。
月のひかりは隈ふくて。秋風のみぞ身には沁む。

久　戀　　靜　御　前

ありのすさびのにくきさへ。ありきの跡は戀しきを。
あかで別れしおもかげは。何時の間にかは忘るべき。

わかれの殊にかふしきは。　同　親のわかれ子のわかれ。

勝れて實にかふしきは。夫婦のわかれふりけり。

濡衣　武藏坊辨慶

春は櫻のながるれば。吉野川とも名づけたり。
秋は紅葉の流るれば。立田川ともいひつべし。
冬も末にふりぬれば。法師ももみぢて流れたり。

妻の行方　刑部卿敦兼

まぜのうちなる白菊も。うつろふ見るこそ哀れなれ。
我等通ひて見し人も。かくしつゝこそ枯れにしか。

鶴群　作者不詳

鶴の群れ居る松山に。千代に八千代を重ねつゝ。
齡は君がためふれや。天の下こそのどかふれ。

狛のわたり　同

狛のわたりの瓜つくり。瓜を人にとられじと。
守る夜數多にふりぬれば。瓜を枕につひねたり。

孝子　同

つくしのやすの彌次郎は。親に孝行つくしけり。
牛馬までも鞭打たず。三反三畝を作りとり。

兵子歌　新納武藏守

肥後のかつをが來たふらば。　ゑんしよ肴でだごもをそふ。
それでも聞かずに來たならば。　頸に刀のひきでもの。

春　　慈鎮和尚

春の彌生のあけぼのに。　四方の山邊を見わたせば。
花ざかりかも白雲の。　かゝらぬ峰こそふかりけれ。

夏　　同

花橘もにほふふり。　軒の菖蒲もかをるふり。
夕ぐれさまの五月雨に。　山ほとゝぎす名のるふり。

秋　　同

秋のはゞめにふりぬれば。　今年もなかばゝ過ぎにけり。
我夜更けゆく月かげの。　かたぶく見るこそ哀れふれ。

冬　　同

冬の夜寒のあさぼらけ。　契りし山路は雪ふかし。
心のあとはつかねども。　思ひやるこそ哀れふれ。

智恵　　親鸞上人

智恵の念佛得ることは。　法藏願力のなせるなり。
信心の智恵なかりせば。　いかでか涅槃を悟らまし。

友千鳥　　作者不詳

滿干絶えせぬ汐の山。　さし出の磯の友千鳥。
君がよはひを幾千代と。　聲もゆたかに鳴きかはす。

春雨　同

あふおもしろの春雨や。　花を散らさぬほどに降れ。
あふおもしろの弓矢の道や。　文事を忘れぬほどにすけ。

古調　同

うばらこきの下には。　鼬笛吹く猿かなづ。
蚱蜢まろは拍子うつ。　蟋蟀は鉦鼓うつ。

丸木橋　作者不詳

うれしやこゝの山蔭の。　谷の小河の丸木ばし。
花觀る人のためぞとて。　何處(とこ)のをぢひも懸けたやら。

都の花　同

いつしか昔の國ぶりに。　かへしてこそはすめらぎの。
都の春のはふをしも。　かざして遊ぶ日はあらめ。

君が齡　同

君がよはひはさゞれ石の。　いはほとふりてむす苔に。
生ふる小松のかげふりて。　鶴の巣ごもる世々までも。

八千世　作者不詳

おふじ事いふ老が身を。　なかしと人はいふめれど。
君は千世ませ八千代ませ。　君は千代ませ八千代ませ。

櫻　川

ふがれも清きさくら川。　磯邊の宮のさと神樂。
花の木蔭にかゞやきて。　劒のまひのいさましや。

同

山時鳥

花そめ衣脱きかへて。　卯の花かさねうちきつゝ。
涼しき月を松の戸に。　山ほとゝきす音づるゝ。

胡蝶の朝寐　　作者不詳

宿の籬の朝顔の。　露のけぬるを待がほに。
あはれ胡蝶の朝寐して。　たが身とふれる夢や見る。

八千代の春秋　　同

嵐の山の山ざくら。　高尾の峯のもみぢ葉。
老いせぬ宿にうつしうゑて。　めづるや八千代の春秋。

君萬歳　　同

君萬歳にましませよ。　我等も御影にそふはらむ。
鶴と龜とはたはふれて。　幸こゝろにまかせたり。

言葉の花　　本居宣長

昔男と身はふりて。のこる言葉の花はふほ。
春や昔の春ふらむ。とばかり今もにほふふり。

柴の戸　同

世のうきことは遁れすむ。柴のあみ戸にさすがまた。
嵐の音の身に志みて。都こひしき山のおく。

吉野山　同

吉野の山に入りにける。人はゆくへも志ら雪に。
戀しき人を志たひても。いづこをはかと尋ねまし。

青海波　本居大平

舞の名におふ青海の。波立ちいでゝふがめする。
聲の志らべも澄む月の。桂の殿にきこゆらむ。

春の野　同

春の彌生に野邊見れば。すみれ花さく山見れば。
雪かあらぬかそこかしこ。櫻の花も咲きそめぬ。

千代の家居　足代弘訓

松の枝には鶴むれて。池の水には龜すめり。
かゝる處に家居せば。千代のうたがひあらじかし。

春の夕　同

寢にゆく烏うちむれて。飛びゆく方の山の端に。
入日のひかりはなやかに。紫だつこそあはれふれ。

四季の感　同

花時鳥過ぎゆけば。月より雪にうつりつゝ。
春夏秋も冬もみふ。一年ふがらあはれなり。

自然の感　同

鳥のはかふくさへづるも。空吹く風の一こゑも。
心に志めて聞くときは。皆たゞふらぬものぞかし。

春至　同

五十鈴の川も氷とけ。高倉山もかすむふり。
内外の宮のへだてふく。紫ゆる春にふりにけり。

夏の夜　同

門田の稲に夕されば。螢飛びかふかげ見えて。
そこ〻しもふく水鷄鳴く。聲もほのかに聞ゆふり。

冬　同

志ぐれ〳〵し神無月。おく霜月もすぎにけり。
師走は雪のさむければ。埋火をのみ友として。

春　近藤芳樹

柳のたもと花の袖。ゆふべ色そふ祇園の。
杜をねぐらに歸りくる。春の烏のうかれ聲。

夏　同

みぎはの棧敷腰かけて。小石踏みつゝ待てどこぬ。
妹がちぎりはたがふとも。空だのめすな日枝おろし。

秋　同

眞葛が原の秋かぜは。たがうらみにか騒ぐらむ。
一つ衾のうちとけて。明くるも知らぬ閨の月。

冬　同

夜半の糸竹おとふけて。そひ寢ほどふきぬ〳〵に。
博多からくみ結びても。ふほとけやすき朝の霜。

宇治萬碧樓の夕の圓居のあひのすさびに　うたへる

木の芽はる風よそよりも。長閑に吹きておもしろき。
この山川をいかなれば。世を宇治とした名づけゝむ。

同

尾花かりふきやどれりし。むかしの秋は去らねども。
萩も紅葉もときめきて。今ぞみやこの宇治の里。

月花　熊澤蕃山

雲のかゝるは月のため。風のちらすは花のため。
雲と風とのありてこそ。月と花とはたふとけれ。

長壽樂　同

人はとがむとてとがめド。人は怒れといからじ。
怒と欲とを捨てゝこそ。常にこゝろのやすからめ。

琴の曲　清水濱臣

峰のあらしか松かぜか。尋ぬる人の琴の音か。
駒をとゞめて聞くほどに。爪音ふるき想夫戀。

春　同

春も半はすぎの戸を。おしあけ方に見わたせば。
軒端の雲はさくらにて。そぼふる雨こそ香ににほへ。

夏　同

雲間の月もやどるふり。水鶏の聲も泣きるふり。
橋かゝるゐふ風に。岩もる清水すゞしくて。

秋　同

秋吹く風の芭蕉葉に。二聲三聲ほとつれて。
窓より西に月かげの。かたぶく見るこそ哀れなれ。

冬

冬ごもりせる雪の夜に。　閨の埋火かきおこし。
炭やく賤がふりはひを。　思へばいとこそ身はひもれ。

同

述懐　　真木保臣

身は朝がほの葉がくれて。　日影まばゆくふりにけり。
晝も袂の去らつゆは。　所せきまでおきまよふ。

春

春は梅にうぐひす。　躑躅や藤に山吹。
櫻かざす宮人は。　花に心をうつせり。

八橋撿校

夏

夏は卯の花たちばな。　あやめはちす撫子。
風吹けばすゞしくて。　水に心をうつせり。

同

秋

秋はもみぢ鹿の音。　千草のはふに松虫。
雁鳴きて夕ぐれの。　月に心をうつせり。

同

冬

冬は去ぐれ初霜。　霰みぞれ木がらし。
さゆる夜のあけぼの。　雪に心をうつせり。

同

天下太平　　同

天下太平ちやふきふに。治る御代の松風。
ひふつるは千歳ふる。池の汀に龜あそぶ。

須磨　　同

須磨の浦わに旅寢して。夜すがら月をぞふがめける。
戀しき人には淡路島。やま〳〵つもれる思ひかな。

明石　　同

所がら名にしおふ。明石の浦の秋のころ。
月さえわたりよる波に。うつろふ影のおもしろや。

草の名　　作者不詳

よしといふも竹の名。あしといふも草の名。
よしあしの屋にすむとても。こゝろは玉の高殿。

景清　　近松門左衛門

景といふも月の縁。きよしといふも月の縁。
景清き名のみにて。うつせど袖にやどらぬ。

酒徳頌　　龜田鵬齋

りうはくりんや李太白。酒を飲まねばたゞの人。
更科越路の月雪も。酒がなければたゞのとこ。

三芳野　　賴山陽

花より明くる三芳野の。春のあけぼの見渡せば。
もろこし人もこま人も。やまと心にふりぬべし。

同　　二川某

芳野の山も小初瀬も。花が咲かねばたゞの山。
曾我兄弟も大石も。かたきうたねばたゞの人。

武夫　　加藤司書

すめら御國の武士は。いかなることをかつとむべき。
たゞ身にもてる真心を。君と親とにつくすまで。

里の花　　其角

花の巷のいやよひに。空もみどりの青によし。
ふらはでそむる色里は。つひ朝ざくら夕ざくら。

秦始皇　　作者不詳

七尺の屏風も越えぬべし。ふごか越えざらむ。
羅綾のたもとも。引かばふごか絶えざらむ。

長生殿　　同

長生殿のうちには。春秋富めり。
ふらう門の前には。月のかげおそし。

甲斐

甲斐にをかしき山の名は。　白根波さき志ほの山。
むろふしかしはやま。　すゞの志げれるねはま山。

木曽路　同

信濃にあんふる木曽路川。　君におもひの深ければ。
みぎはに袖をぬらしつゝ。　あらぬ瀬をこそすゝぎつれ。

竹の節　同

竹のよふがくあはれふる。　節も定めず起きぬつゝ。
人に志られぬこひもして。　鳥の鳴くまで寝も入らず。

水の宴　同

水の勝れてをぼゆるは。　西天竺の白鷺いけ。
昆明池の水のいろ。　行末久しく住むとかや。

同　同

賢人の釣をたれしは。　巖凌瀬の河の水。
月影流れ漏るふるは。　山田の筧の水とかや。

同　同

かやの下葉をとぢるは。　みしま入江のこほり水。
春立つそらの若水は。　くむとも〳〵つきもせじ。

難波の梅

難波の梅の下ふしは。一夜ばかりのこゝちして。
花ふき里にゐく雁の。鳴く音をたびの道ぶるべ。

宍戸真徴

寢覺の窓

ねざめの窓の小夜あらし。うつは忘くれかもみぢ葉か。
契りし人はかれにしを。何今さらにおとづれむ。

本居内遠

都の花

上野の花に日くらしや。あすは淺草あすか山。
こゝろ〳〵にむかふ島。春の遊びぞのどかふる。

同

早春

小筑波のねを見わたせば。いまだ春とも忘ら雪の。
霞のうちにあらはれて。隅田川原は風さむし。

海野遊翁

年内早梅

梅のさけるは春ふがら。雪のけしきぞ春ふらぬ。
ことわりふれや鶯の。谷より出でゝ來鳴かぬも。

同

柳に鶯のかた

柳が枝にうぐひすの。うちとけて鳴く聲聞けば。
垣根の雪のむらぎえも。殘るかたこそふかりけれ。

同

静の今様舞ひたるかた　同

賤のをだまきくりかへし。昔を今とうたひけむ。
その世のさまは知らねども。思ひやるこそ哀れなれ。

牛の繪に　石川依平

春の野がひのおのが身は。うら若草にうらふれて。
心のどけきおきふしを。うしとは何か思ふべき。

春の月　同

梅咲く園にかすみつゝ。峰のさくらの花ぐもり。
曇りてはてぬ朧夜の。月こそ春のひかりふれ。

夏の月　同

まだしきほどの霍公鳥。初音待つ夜のまくらより。
なれて涼しき月かげに。閨の戸さゝであかすなり。

秋の月　同

桐の葉わけに影見えて。秋とほのめく夕より。
忽ちぬまち待ちとりて。幾夜か月をふがめけむ。

冬の月　同

木の葉ふり去く山の端の。時雨にくもり霜にさえ。
雪に照りそふ月かげを。ふどすさまじと思ふべき。

三番叟のかたに今様をと人のこへるに　加納諸平

立ち舞ふ袖につゝみても。猶あまりあるうれしさを。
さやけき鈴の音に立てゝ。君が千とせのかずそへむ。

電信　白石千別

浦島が子にあらふくに。波の底にも行きかよふ。
奇しき線のおとづれを。居ながら知る世とふりにけり。

蒸氣車　同

轟きそむる音につれ。龍かも翔ると見るばかり。
雲をおこして磯ぎはを。はしりくるまぞ目ざましき。

訓盲院　同

めしひたる目のあくまでも。惠の杖をつくゝと。
仰ぎても知れ明らけき。御代の光にくまはふし。

祝言　黒川眞頼

十日の雨やいつかの風。ふれども土をそこふはず。
吹けども枝に音もふき。君が御代こそたのしけれ。

雪月花　飯田武郷

上野の岡のはるの花。隅田かはらの秋の月。
眺むるそのまに明けくれて。我身は雪とぞふりにける。

新年　鶴　　鈴木重嶺

年たつけふは富士の嶺も。　霞むがごとく見えにけり。
人のこゝろもうき島の。　原にぞたづも舞ひあそぶ。

春　松　　同

千代田の里の名にあえて。　ついぢの松こそ榮えけれ。
かすみの衣ひきはへて。　みどりの色ぞうるはしき。

早　苗　　同

さふへとり〳〵賤の女が。　うたへる聲ぞおもしろき。
その菅笠もなりにあふ。　白き色こそすゞしけれ。

橘　　同

寢くたれ髪のさみだれて。　雲たちまよふ妹が門。
さゝかをりくる立花は。　誰が昔をか忘のばする。

夕　露　　同

尾花はまねぎかるかやは。　思ひみだるゝ夕まぐれ。
ちぎりし誰をまつとてか。　玉忘きわたす庭のつゆ。

水邊草花　　同

野川の岸に立ちよれば。　真萩きちかうをみふへし。
かげをうつして水さへに。　錦とこそは見えにけれ。

初霜

おろかおいさへ穂に出でゝ。冬寒からず思ひしを。
有明の月のかげきえて。初霜白くぞおきにける。

同

月前時鳥

むら雲晴れて月かげを。見ばやとそゞろあるきして。
誰をかさそひやかましと。思ふ折から去ぐれきぬ。

同

寄竹戀

千代かはらじと呉竹の。起きふしたのむかひなくて。
我思ふ人はいつのまに。よそにふぴくか音もせぬ。

春

かどの松ふく春風に。軒端の梅もかをるなり。
簾の竹のうぐひすは。百よろこびをふのりして。

小杉榲邨

夏

花の春邊のひがし山。梢にいとふあらし山。
柳青葉のかもがはや。匂ふが月のかつら川。

同

秋

いたづらぶしに見出せば。こよひの月もさし出たり。
かきねのむしもふり出たり。つま琴いざとれ笛吹かむ。

同

同

人のこゝろのあき風に。　その言の葉も枯るゝなり。
ひとりふすまの手枕に。　去めりそへ行くかりふきて。

冬　同

ふけ去づまりし冬の夜に。　むろの松風おとすふり。
その梅が香もかをるふり。　猿戸たゝくかむら去ぐれ。

待戀　同

またれ〳〵てねやの戸を。　あけかた近く詠むれば。
ぬるゝ袂の露とめて。　やどれる月こそわりなけれ。

京の四季竹枝調　同

色香あらそふ夜ざくらに。　山邊の月もにほふふり。
祇園はやしも薫るふり。　うかれて來ませいざや君。

風まちつけてうすきぬの。　袖をつらねて行きかへり。
瀬々の白玉水きよき。　川原につどふ夕すゞみ。

ぬれて色ますいくしほの。　紅葉おくある花頂山。
去ぐれ厭はでけふもまた。　さして來つどふ手から笠。

むかへ車の音きけば。　心も今はまるやまに。

とけて嬉しきこの頃の。　思ひつもりし雪見酒。

楠　公　　讀人不詳

その名ゆかしき橘の。　實さへ花さへその葉さへ。
昔がたりにかをりきて。　あふがぬ人こそふかりけれ。

春　　仝

春のはしめになりぬれば。　豐さかのぼる日の御旗。
のどけき風になびかせて。　かゝげぬ里こそふかりけれ。

夏　　仝

今日はきのふにまさりゆく。　まふひの窓の若竹は。

おひさき志るく見ゆるなり。　ふみよむ友もかゝれかし。

秋　　仝

たのめし人の言の葉を。　思ひこがれてふくる夜は。
軒端の荻にそよと吹く。　風にもこゝろうごくふり。

冬　　仝

おまへの小簾を巻きあげし。　その故ごとのみやびさへ。
思ひやられてゆかしきは。　大内山のはつみゆき。

教　訓　　仝

鳥もけものも草も木も。　皆世のためにふるとかや。

ましてたふとき人として。　たゞに空しく過ぎめやも。

人とある身のゆきかひは。　君に忠義をつくすべし。
親に孝行つくすべし。　妻子兄弟めぐむべし。

仝

神路の山に立つ杉の。　ふほきに心ならひふば。
神のめぐみのいやましに。　孫子のすゑも榮えふむ。

仝

五十鈴の河の清き瀬を。　心となしてみふ人の。

神と君とに仕へふば。　世は治りて榮えふむ。

仝

内外の宮の玉垣の。　光は四方にへだてふく。
かゞやくまゝに天が下。　あふがぬ人こそふかりけれ。

王政復古の歌　物集高見

王政復古の。　そのかみを。　おもへば凄し。　慶應の。
三とせの冬の。　十二月。　九日の日を。　はじめにて。
都の空に。　たちかへる。　春のひかりも。　ぬばたまの。
世は苟薫と。　亂れつゝ。　あやめもわかぬ。　墨染の。
鞍馬にひゞく。　関の聲。　甲の袖に。　かゞやくや。

星のくらぬも。三　台　の。影うすれゆく。さしぐしの。
曉くらき。鳥羽伏見。大内山の。山　風　に。
錦の御旗。ひるかへし。大將軍の。いでましに。
勇氣いやます。ますら雄か。いくさよばひも。いかづちと。
轟きわたる。修羅の道。斬りつ斬られつ。阿毘叫喚。
血ちほにそむる。からくれふぬ。赤きこゝろを。とりどりに。
仆れかさふる。ちかばねは。敵かみかたか。彼はたれどき。
踏みちたきゆく。戰　場　の。ふらひ常ふき。露の身と。
かざす劍の。東の間も。君をわすれぬ。ものゝふの。
道のはてこそ。あはれふれ。天地も動く。震　動　に。
ほのほさかまく。淀　の　城。雲かと見えて。たちのぼる。
煙のすゑの。かげろふも。消えて治る。君が世の。

のどけき春に。ふがらへて。昔がたりと。そのかみを。
語りつゝ酌む。杯　に。老いたるかげも。かつ見ゆる。
このうたげこそ。たのしけれ。

老女白菊の歌

落合直文

その一

阿蘇の山里。秋ふけて。眺さびしき。夕まぐれ。
いつこの寺の。鐘ふらむ。諸行無常と。つげわたる。
をりちもひとり。門にいで。父を待つなる。少女あり。
袖に涙を。おさへつゝ。うれひにちづむ。そのさまは。
色まだあさき。海　棠　の。雨にふやむに。ことふらず。
父は先つ日。遊獵にいで。今猶おとづれ。ふしとかや。

軒に落ちくる。　木の葉にも。　筧の水の。　ひゞきにも。
父やかへると。　うたがはれ。　夜ふ〳〵ねふる。　をりもふし。」
今宵た雨さへ。　ふりいで〻。　庭の芭蕉の。　音たゞく。
鳴くなる虫の。　こゑ〳〵に。　いとゞあはれを。　そへてけり。」
かゝるさびしき。　夜半ふれば。　ひとりおもひや。　たへざらむ。
菅の小笠に。　杖とりて。　いでやくさまぞ。　あはれふる。」
八重の山路を。　わけやけば。　雨はいよ〳〵。　ふり志きり。
さらぬも志げき。　袖の露。　あはれいくたび。　志ぼるらむ。」
俄に空の。　雲はれて。　月のひかりは。　さしそへど。
父を志たひて。　迷ひゆく。　こゝろの闇には。　かひぞふき。」
遠くあふたを。　ふがむれば。　燈火ひとつぞ。　ほのみやる。
いづこの里か。　わかねども。　それをたよりに。　とめてゆく。」

松杉あまた。　立ちふらび。　そのうちに。
讀經の聲の。　聞ゆるは。　いかなる人の。　おこなひか。」
簾もふかば。　やれくづれ。　庭には人の。　あともなく。
月のかげのみ。　さえ〳〵て。　梢のあたり。　風ぞふく。」
門べに立ちて。　おとふへば。　かすかにこたふ。　聲すふり。」
まつまほどふく。　年わかき。　山僧ひとり。　いできたり。
志ばしこなたを。　うちふがめ。　あやしみ居たる。　さまふりき。」
少女はそれと。　志るよりも。　やがてまちかと。　ずゝみより。
妾はあやしき。　ものならず。　父をたづねて。　きつるふり。
あはれやとへを。　志らしなば。　いかで教へて。　たまへかし。」
少女の姿を。　よく見れば。　にほへる花の。　かほばせに。
柳の髪の。　みだれたる。　此世のものにも。　あらぬふり。」

山僧こゝろや。　とけぬらむ。　少女をおくに。　さそひやき。
ぬしはいつこの。　たれふるか。　つばらにかたれ。　われ聞かむ。」
をりしも風の。　ふきすさび。　あたりのけしき。　ものすごく。
軒の梢に。　むさゞひの。　鳴くふる聲さへ。　きこゆふり。」
少女はいよ〳〵。　たへがたく。　落つる涙を。　うちはらひ。
妾はもとは。　熊本の。　ある武士の。　女ふり。」
はしめは家も。　富みさかえ。　こゝろゆたかに。　ありければ。
月と花とに。　身をよせて。　たの忘る世をば。　おくりにき。」
一とせいくさ。　はじまりて。　青き千草も。　血にまみれ。
吹きくる風も。　なまくさく。　砲のひゞきも。　たえまなし。
親は子をよび。　子はおやに。　わかれ〳〵て。　四方八方に。
走りにげゆく。　そのさまは。　あはれといふも。　あまりあり。」

この時母と。　諸共に。　そこを出でたち。　はる〳〵と。
阿蘇の奥まで。　のがれきて。　忘ばしそこには。　すみにけり。」
後にし聞けば。　父は。　賊にくみして。　ましますと。
いふよりいとゞ。　胸つぶれ。　袖のひるまも。　あらざりき。」
あけくれ父を。　まつほどに。　はやくも秋の。　風たちて。
雲井の雁は。　かへれども。　音づれだにも。　ふかりけり。
母はおもひに。　たへかねて。　やまひの床に。　つきしより。
日ごと〳〵に。　おもりゆき。　つひにはかふく。　世をさりぬ。」
父の生死も。　わかぬまに。　母さへかへらず。　ふりぬれば。
夢にゆめみし。　こゝちして。　おもへば今猶。　身にぞしむ。」
いかにつれふき。　わが身ぞと。　思ひかこちて。　ありつるに。
去年の春また。　ゆくりなく。　父は家にぞ。　かへり來し。」

母のうせぬと。聞きしより。たゞにふげきて。ありければ。
世のふらはしと。ふぐさめて。この年月は。過ぎにけり。」
先つ日かりにと。いでしより。待てどくらせど。かへらねば。
またもこゝろに。たのみふく。かゝる山路に。たづねきぬ。」
妾の姓は。本田なり。名は白菊と。よびにけり。」
父は昭利。母は竹。兄は昭英。その兄は。
行ひあしく。父上の。いかりにふれて。家出せり。」
風のあしたも。雨の夜も。去のばぬ時の。ふきものを。
いづこの空に。まよふらむ。今ふほやとへの。去れぬふり。」
これをきくより。山僧は。俄に顔の。けしきかへ。
ものをもいはず。墨染の。袖を去ぼりて。居たりけり。」
去ばらくありて。山僧の。少女にむかひ。いひけるは。

夜もはやいたく。ふけぬれば。明くるあ去たを。またるべし。」
すゝむる言葉に。おのづから。ふかき情の。見えければ。
さすがに少女も。いふみがね。一夜はそこに。かりねせり。」
ねむるほどふく。戸をあけて。あやしく父ぞ。いりきたる。」
枕邊ちかく。さしよりて。聲もあはれに。涙ぐみ。
われあやまちて。谷におち。今は千尋の。底にあり。」
谷は荆棘の。おひ去げり。いてゝきぬべき。道もなし。」
明日さへ去らぬ。わがいのち。せめてこの世の。わかれにと。
思ふおもひに。たへかねて。泣〳〵ここには。たづねきぬ。」
言葉をはらぬ。そのさきに。裾ひきとめて。父上と。
呼ばむとすれば。あともふく。窓のともし火。影くらし。」
夢かうつゝか。あらぬかと。思ひみだれて。あるほどに。

暁ちかく。ふりぬらむ。木魚の聲も。たゆむふり。」

その二

夜もやうくに。明けはふれ。心もふにか。ありあけの。
月のひかりの。影おちて。庭のやり水。音ずごし。」
少女は寺を。たち出てゝ。またもの暗き。杉村を。
たどりてゆけば。遠かたに。きつねの聲も。きこゆふり。」
道のゆくての。枯尾花。おどさやくに。うちふびき。
ふきくる風の。身にしみて。さむさもいとゞ。まさりけり。」
岩根こゝしき。山坂を。のぼりつおりつ。ゆくほどに。
みやまの奥にや。ふりぬらむ。人かげだにも。見えぬなり。」
梢のあたり。ふくふるは。いかふる鳥の。こゑふらむ。
木陰をはしる。けだものは。熊のたぐひに。あるふらむ。」

こゝは高根か。さら雪の。袖のあたりを。すぎてゆく。
わが身をのせて。はしるかと。思へばいとゞ。おそろしや。」
はるばる四方を。見わたせば。山また山の。はてもなし。
父はいづこに。おはすらむ。かへりみすれど。かひぞふき。」
なりしも後より。聲たてゝ。山賊あまた。よせきたり。
にぐる少女を。ひきとらへ。かたくその手を。いましめぬ。」
あふおそろしと。さけべども。人ふき山の。おくなれば。
山びこならで。外にまた。こたへむものも。ふかりけり。」
山のかけちを。をれめぐり。谷の下道。ゆきかよひ。
ともふはれつゝ。ゆくほどに。あやさき家にぞ。いたりけり。」
やれかゝりたる。竹の垣。くづれがちなる。苔の壁。
あたりは木々に。とざゝれて。夕日のかげも。てりやらず。」

内より出れもの。　いできたり。　少女のすがたを。　見てしより。
めでたき得物と。　おもひけむ。　ほ手うちわらふ。　さまにくし」
兼てまうけや。　出たりけむ。　酒と肴を。　とりいでゝ。
のみつくらひつ。　するさまは。　世にいふ鬼に。　こゝとふらず」
頭とおぼしき。　ものひとり。　少女のもとに。　さしよりて。
鬚をふでつゝ。　いひけるは。　我はこの家の。　あるじぶり。
汝のこゝに。　とらはれて。　きたるは。　ふかき縁なり。
今よりわれを。　夫とたのみ。　この世のかぎり。　つかへてや」
我家に久しく。　ひめおける。　いとも妙ふる。　小琴あり。
幾千代かけて。　ちぎりせむ。　今日のむしろの。　よろこびに。
かふでゝわれに。　きかせてよ。　唄ひてわれを。　ふぐさめよ」
仮にもいふまむ。　その時は。　剣の山に。　のぼらせて」

針の林を。　わけさせて。　からきうきめを。　みせやらむ」
少女はいふと。　おもへども。　いなみがたくや。　思ひけむ。
ふくゝ小琴を。　ひきよせて。　調べいでしぞ。　あはれふる」
風や梢を。　わたるらむ。　雁やみそらを。　ゆくふらむ。
軒端を雨や。　すぎつらむ。　岸にや波の。　よせくらむ」
いとも妙ふる。　出らべには。　かしこき神も。　まひやせむ。
いとめでたき。　手ふりには。　ひそめる龍も。　をどるらむ」
嵯峨野の奥に。　出らべたる。　想夫懸には。　あらねども。
父のゆくへを。　出のぶふる。　心はふにか。　かはるべき」
峯のあらしか。　松　風　か。　たづねる人の。　琴の音か。
ひとり木蔭に。　たゞずみて。　きゝぬし人や。　たれふらむ」
たつねる人の。　つま音と。　いよゝ心に。　さとりけむ。

ちらべのをはる。をりしもあれ。きりていりしぞ。いさましき。
双のひかりに。おそれけむ。とみのごとにや。おぢにけむ。
きられてさけぶ。ものもあり。逐れてにぐる。ものもあり。
きりて入にし。その人の。すがたはそれと。わかねども。
身に纒ひしは。墨染の。ころもの袖と。ちられたり。
わなゝく少女の。手をばとり。月のかげさす。まどにきて。
ふおどろきそ。おどろきそ。われは汝の。兄ふるぞ。
いざこまやかに。かたらはむ。心をちづめて。きゝねかし。
父のいかりに。ふれしより。こゝろにおもふ。ことありて。
東の都に。のぼらむと。筑紫の海をば。船出しぬ。
あらき波路の。かぢまくら。かさね〳〵て。須磨明石。
淡路の島を。こぎめぐり。武庫の浦にぞ。はてにける。

こゝより陸路を。たどりしに。こころはやふひの。末なれば。
並木のあたり。風ふきて。衣のそてに。花ぞちる。
都につきし。その後は。たゞ文机に。よりぬつゝ。
朝夕ふらひし。千々のふみ。はしめて人の。道ちりぬ。
父のめぐみを。ちるごとに。母のふさけを。ちるたびに。
悔ちきことのみ。おほかれば。なきてその日を。おくりけり。
こゝろをあらため。仕へむと。ふる里さして。かへりしに。
いくさのありし。あとふれば。そのさびしさぞ。たゞふらぬ。
見渡すかぎりは。野とふりて。むかしのかげも。あらしふく。
尾花の袖も。うちやつれ。露の玉のみ。ちりみたる。
こゝや我家の。あとならむ。そや父母の。死骸ふらむ。
てらす夕日の。かげうすく。ちまたの柳に。烏ふく。

たのみすくふき。我身ぞと。思ひわぶれば。わぶるほど。
浮世のことの。いとはれて。かの山寺に。のがれけり。」
朝夕讀經を。するごとに。はかなきことのみ。かこたれて。
よみゆく文字の。數より。も。去げきは袖の。ふみだふり。」
忍ちそなたの。たづねきて。ことのよしをば。聞きしとき。
そのうれしさや。いかなりし。そのかふしさや。いかなりし。」
たゞにわが名を。名のらむと。おもひしかども。去かすがに。
名のりかねたる。身のつらさ。名のるよりなほ。つらかりき。」
あかつきふかく。別れしを。道にてこともや。ありなむと。
敵を追ひきて。今こゝに。汝をかくば。たすけたり。」
そふたを助けし。上からは。心にのこる。こともふし。
この後何の。おもありて。父にふたゝび。まみえまし。」

彼世にありて。またふむと。いひも果ぬに。剣太刀。
ぬく手も見せず。一すぢに。腹を切らむの。さまふりし。」
少女ば見るより。聲たてゝ。かたく其手を。おさへつゝ。
ふきつさけびつ。ふぐさむる。こゝろの底や。いかふらむ。」
なりしも空の。霜去ろく。夜半の嵐の。音たえて。
雲間さえゆく。月かげに。かりがね遠く。ふきわたる。」

その三

四方にきこゆる。虫の音も。哀れふわると。きくほどに。
ありあけ月夜。かげきえて。峯のよこ雲。わかれゆく。」
去づかにそこを。たち出でゝ。あたりのさまを。ふがむれば。
軒の松風。聲かれて。あれたる庭に。霜去ろし。」
手をばさられつ。とりつして。かたみに山路を。すぎゆけば。

夕の賊の。　むれふらむ。　あとよりあまた。　追ひてきつ。」
山僧それと。　知りしかば。　早くも少女を。　遁しやり。
ひとりそこには。　とゞまりて。　きりつきられつ。　たゝかひつ。」
去げる林を。　をれめぐり。　谷のかけ橋。　うちわたり。
少女はからく。　にげしかど。　あとに心や。　のこるらむ。」
きられて痛手は。　おはせぬか。　兄上ときく。　ましませと。
はるかに高ねを。　うちふがめ。　去のぶ心ぞ。　あはれふる。」
道のかたへに。　去めゆひし。　小祠はたれを。　まつるらむ。
涙ふからに。　ぬかづきて。　いのる心を。　神や去る。」
そこに柴かる。　翁　あり。　ふとなる少女を。　見てしより。
いかにあやしと。　おもひけむ。　こふたに近く。　よりてきぬ」
ことのよしをは。　たづねしに。　まことかふしき。　ことふれば。

翁は少女を。　ふぐさめて。　我家にともなひ。　かへりけり。」
深くとざしゝ。　柴　の　門。　ふかばやれにし。　竹　の　笠。
片山里の。　去つけさは。　ひるふほ夜に。　ことならず。」
木々の木葉の。　ちりみだれ。　まがきの菊の。　色もふく。
あらしは時雨を。　さそひきて。　虫のふく音も。　いとさむし。」
父のゆくへに。　兄　の　身に。　朝夕こゝろに。　かゝれども。
深きふさけに。　ほだされて。　暫しそこには。　とゞまりぬ」
ひまゆく駒の。　あしはやみ。　二とせ三とせは。　夢の間に。
はかなくすぎて。　またさらに。　のどけき春は。　めぐりきぬ。」
み山の里の。　ならひにて。　髪もすがたも。　みだせども。
その名におへる。　白　菊　の。　色香はいかでか。　うせぬべき。」
若菜つみにと。　うちむれて。　ちかき野澤に。　ゆく道も。

ならの林に。一もとの。花のまゝるが。ごとくふり。
里の長ふる。ふにがしも。ほのかにそれと。きゝつらむ。
媒人ひとり。たのみきて。長きちぎりを。もとめけり。
翁はいたく。かしこみて。こへるまに〳〵。ゆるしたり。
少女はかくと。きゝしとき。其おどろきや。いかふらむ。
袖もて涙を。おさへつゝ。たゞにふきてぞ。居たりける。
思ひまはせば。母上の。此世をさらむ。そのをりに。
妾をちかく。めしたまひ。いひのこされし。ことぞある。
ある年秋の。末つかた。み墓まゐりの。かへるさに。
つゆけき野路を。わけくれば。白菊あまた。ときみてり。
にほへる花の。その中に。あはれふく子の。聲すふり。
かゝるめでたき。子だからを。いかふる親か。すてつらむ。

悲しきことにて。ありけりと。ひろひとりしは。そなたなり。
菊さく野邊にて。あひたるも。深きちぎりの。あるふらむ。
千代に八千代に。さかえよと。やがてその名を。おはせにき。
更に告ぐべき。事こそあれ。汝はたえて。去らざれど。
汝の兄とも。たのむべく。夫といふべき。人こそあれ。
はやく家出を。ふしてより。今にゆくへは。わかねども。
老いたる父も。ましませば。かふらず。かへりくべきふり。
かへりきたらむ。そのをりは。ゆくすゑかけて。ちぎりあひ。
夫といひ。妻とよばれつゝ。この世たのみと。おくりてや。
母のいまはの。言の葉は。今なほ耳に。のこるなり。
いかでか教に。そむくべき。いかでか教に。そむかれむ。
さはいへ。こゝに來てしより。翁のめぐみは。いとふかし。

とやせむかくこと。　人　志れず。　思ひまどふも。　あはれふり」
かれを思ひて。　ふき志づみ。　これを思ひて。　うちふげき。
思ふおもひは。　千々ふれど。　死ぬるひとつに。　さだめてむ」
をりしも媒人。　いりきたり。　少女に贈りし。　そのものは。
にしきの衣。　あやの袖。　實にも眩ゆく。　見江にけり」
少女の心の。　かなしさを。　あたりの人は。　志らざらむ。
見つゝ翁の。　よろこべば。　隣の嫗も。　來て祝ふ」
時雨ふりきて。　てる月の。　かげもをぐらき。　さ夜中に。
いつこをさして。　ゆくふらむ。　少女は忍びて。　家出しぬ」
村里とほく。　はなれきて。　川風さむき。　小笹原。
死を急ぎつゝ。　ゆきゆけば。　水音すごく。　むせぶなり」
雲井をかへる。　かりがねも。　小笹をわたる。　風の音も。

にぐる少女の。　こゝろには。　追手とのみや。　聞ゆらむ」
胸つぶれしは。　いくそたび。　胸いためしは。　いくたびか」
橋のたもとに。　身をかくし。　我こしかたを。　ふがむれば。
遠里をのゝ。　ともし火の。　影より外に。　かげもふし」
下に流るゝ。　川　水の。　底のこゝろは。　知られねども。
あはれかふしき。　音するは。　少女が死をや。　さそふらむ」
死ぬるいのちは。　をしまねど。　かくと志らさむ。　そのをりは。
さこそふげかめ。　父　上の。　いかにかこたむ。　わが兄は」
父上ゆるさせ。　たまひてよ。　兄上うらみ。　ふしたまひそ。
この世をわれは。　先だちて。　母のみもとに。　待ちてあらむ」
南無阿彌陀佛と。　いひすてゝ。　とばむとすれば。　うしろより。
まちてとよびて。　引きとめし。　人はいかふる。　人ふらむ」

おぼろ月夜の。かげくらく。さやかにそれと。わかねども。
春秋かけて。志のびてし。兄と少女は。志りにけり。
夢かうつゝか。まほろしか。思ひみだるゝ。さ夜中に。
里のわらべの。ふきすさぶ。笛の音遠く。きこゆふり。
ことひつことはれつ。來し方を。聞きつきかれつ。ゆくすゑを。
一夜かたりて。あかせども。猶言の葉や。のこるらむ。
わがふる里の。こひしさに。道をいそぎて。かへらむと。
野こゑ山こえ。ゆきゆけば。かすみもふびき。花もさく。
日數もいくか。ふる雨に。ぬれてやつるゝ。たび衣。
家にかへりし。そのをりは。五月ごろにや。ありつらむ。
山ほとゝぎす。ふき志きり。かどの立花。かをるふり。
志げる夏草。ふみわけて。軒端をちかく。立ちよれば。

むかし志のぶの。露ちりて。袖にかゝるも。あはれふり。
妻戸おしあけ。内みれば。あやしく父は。ましましき。
こふたのおごろき。いかふらむ。かふたの嬉しさ。またいかに。
父上ききくと。音ふへば。子等もきくと。こゝふふり。
ことをこまかに。聞きてより。父もあはれと。おもひけむ。
兄のいましめ。ゆるしやり。妹のみさをゝ。ほめにけり。
親子の三人。うちつどひ。すぎにし事ども。語りあひて。
くむ盃の。そのうちに。うれしきかげも。浮ぶらむ。
我あやまちて。谷におち。のぼらむすべも。あらざれば。
木の實を拾ひ。水のみて。ながき月日を。おくりにき。
ある日のあした。おきいでゝ。峯のあたりを。見あくれば。
ふがくかゝれる。藤かつら。上に猿の。ふきさけぶ。

ふくなる聲の。何とふく。こゝろありげに。聞ゆれば。
神のたすけと。よぢのぼり。始めて峯に。のぼりえつ。」
嬉しとあたりを。見わたせば。さきのま志らは。跡もなく。
木立の志げき。山かげに。蟬の聲のみ。きこゆなり。」
浮世のふらひと。いひながら。うき世の常とは。いひふがら。
人になさけの。うぜはてゝ。獸にのこるぞ。あはれふる。」
父のことばを。聞き居たる。二人の心や。いかふらむ。
うれしと兄の。たちまへば。たのしと妹も。うたふふり。」
千代に八千代と。いひ〳〵て。ともによろこぶ。をりしもあれ。
後の山の。まつか枝に。夕日かゝりて。たつぞふく。」

明治二十五年八月九日刷印
明治二十五年八月十日出版

正價金貳拾五錢

版權所有

編纂兼發行者　東京市神田區北神保町十二番地八重垣館　岸本宗道
東京市麹町區飯田町五丁目卅七番地　大宮宗司

編纂者　東京市麹町區飯田町五丁目廿六番地　近藤圭造

印刷者　東京市神田區表神保町三番地　東京堂

發兌所　東京市日本橋區本石町三丁目十六番地　博文館

大賣捌　大坂市東區備後町五丁目　盛文館

關西發賣元

東京堂發兌圖書大賣捌所

東京　博文館
仝　東海堂
仝　巖々堂
仝　信文堂
仝　水野慶次郎
仝　福島屋書店
大坂　吉岡平助
仝　梅原龜吉
仝　柳原喜兵衛
仝　日本新聞會社
仝　中村峰雄
仝　岡島支店
仝　平井新聞舗
京都　大黒屋書舗
仝　便利堂
東枝律書房
名古屋　川瀬代助
仝　三輪文次郎
熊本　長崎次郎

鹿兒島　吉田幸兵衛
仝　山元正治
神戸　吉岡支店
仝　日本新聞會社支店
仝　熊谷久榮堂
仝　舟井新聞舗
上野　安屋精文堂
四日市　伊藤善太郎
津　河島九右衛門
豊橋　高須廣治
濱松　谷島屋源三郎
静岡　文源堂
仝　静陵舘
仝　廣瀬市藏
甲府　柳正堂
横濱　里見松泉堂
仝　弘集堂
仝　丸屋書店
佐倉　吉田徳兵衛

水戸　川又銀藏
大津　澤一商店
高山　舛屋重兵衛
長野　西澤喜太郎
松本　水琴堂
仝　高美書店
仝　松榮堂
仝　鶴林堂
上諏訪　宮坂日新堂
稲荷山　寺澤鶴吉
前橋　煥乎堂
仝　文江堂
仝　報告堂
高崎　煥乎堂
栃木　宮川庸三郎
仝　城山常次郎
宇都宮　集英堂支店
仝　手塚祐次郎
平　清光堂

福島　萱間左右太
仙臺　木村文助
仝　佐勘書店
仝　文學館
石ノ卷　山口徳之助
登米　宮崎日新舘
佐沼　近源商店
盛岡　便益堂
仝　東北堂
弘前　野崎九兵衛
仝　近松徳太郎
青森　鎌田書店
山形　荒井多四郎
仝　八文字屋書店
米澤　素月晨平
仝　須佐權平
秋田　成見嚼堂
仝　鈴木秋穗堂
仝　片谷同盟堂
酒田　鈴木誠信堂
横手　大澤忠四郎
増田　東海林書店

福井　品川太右衛門
武生　安立庄三郎
金澤　雲根堂
小松　宇都宮源平
富山　清明堂
高岡　學海堂
新潟　林富吉
仝　櫻井産作
長岡　上田屋治平
仝　目黒十郎
水原　西村六平
村上　備前屋竹八
高田　室直三二郎
仝　高橋つれ
直江津　栫村書店
柏原　中井正吉
鳥取　横山安次郎
仝　旭日堂
松江　川岡清助
姫路　朝榮社
岡山　武内彌三郎
仝　田中耳目堂

尾ノ道　三木文明堂
廣島　松村善助
山口　清水一二三堂
仝　超世舘
和歌山　平井文助
徳島　坂井萬吉
高知　村岡書店
仝　山中專助
仝　澤本駒吉
博多　積善館支店
仝　森岡書店
久留米　菊竹書店
柳川　一草堂
大分　山川正三郎
長崎　安中半三郎
仝　鶴野常藏
佐賀　河内荘助
函館　魁文社
仝　愛新軒
江差　辻二八堂
札幌　玉振堂
仝　聚文堂

日本歴史全書

たらむ後は猶大に振ひてまの類の書を續刊して歴史全書の名を全からしめ、以て本邦歴史の全璧をつくり讀者と共にまれを不朽に傳へむ

●目次◎第一編日本書紀◎第二編續日本紀上◎第三編同下◎第四編日本後紀◎天書◎第五編續日本後紀◎第六編文德實錄◎國史捨遺◎第七編三代實錄◎第八編同下◎第九編日本紀略◎第十編本朝世紀◎以上に掲ぐる書目は僅に十種に過ぎざれども本邦の歴史はこれにて完備すといふにはあらず、まづ以上の書目を刊行して

日本書紀

内藤耻叟序文井上頼圀撿閲岸本宗道。大宮宗司校訂

八月六日出版

和装大版美本紙數六百九十餘頁

正價六十五錢郵便税拾貳錢

本書は、本朝の正史にして、元明天皇の養老四年に、舍人親王、及び、太安麻呂等の勅を奉して撰修せられしものなり、先づ、神代卷を上下とし、第三卷神武天皇より、第三十卷持統天皇十一年八月にいたるまで、凡九百六十三年間のことを載せたり、されば、この書は、我國史の最も古きものにして、その事實の明確なるは勿論、實に本邦歴史の基礎たる大典なり、故に、苟も、我國民たらむ者は、その修むる學問の何たるをいはず、國民の義務として、必ず、先づ、本書を讀まざるべからず、さるを、今日世間に行はるゝところの刊本數種ありといへども、いづれも、皆、大部なるをもて、その價も亦隨ひて貴く、得るに便ならざるのみならず、普通の版本は、魯魚の誤謬頗る多く、或は臆測私意を加へ、ほしきまゝに變換制定ゝたるものさへありて初學者、そのいづれによるべきかに苦むものおほし、まことに遺憾といふべし、さるに今般出版せむとする書は更なり、從來諸家の秘藏にかゝる古寫本等も、悉く、これを渉獵し、中に就き、その善本を撰びて、據本と定め、他の異本をも漏く對照して、その價値の非常に低廉なることなり、殊に、こゝに大書をべきハ、その何人たるをえらばず、一本をえられむこと、これ、即ち、この必讀なる書を出版するにあたりて、國中多數の人の目に觸れしめむとの微志にいでたるものなり、苟も、我大八洲の國民たらむものは、その何人たるをえらばず、一本をえられむこと、

一手發賣元　東京市神田區表神保町　東京堂書房

新撰長歌集正誤

頁	行	誤	正
四十四	一	くらおかみ	かひならし。
九十三	一	かひならし。	追ひねらふ
九十四	一	追ひねらふ	つくば
百	一	つくば	家わすれ
同	一	家わすれ	まにまに
百廿三	一	まにまに	おそのたはれ男
百廿六	一	おそのたはれ男	真字。
同	一	真字。	國學大家北村季吟正誤表
同	一	國學大家北村季吟正誤表	正
同	一	正	誤
同	一	誤	正
同	一	迫ゝ。	迫ゝ。
同	一	玉津島。	玉津島。
同	一	乃至六十	乃至六十
同	一	傳ゝ	傳ゝ
同	一	續ゞ	續ゞ
同	一	ゝ、じ、ま。	ゝ、じ、ま。
二十七	一	一三季吟	一四季吟
二十八	一	風投筆	風投筆
同	一	迎水亭	迎水亭
同	一	來命一	來命一
三十九	一	可二貫	可二貫
四十五	一	女の女	女の女
同	一	季吟傳授之	季吟傳授之
同	一	元錄	元錄
同	一	元錄	元錄
同	一	傳授之季吟	傳授之季吟
同	一	女女	女女
同	一	可ゝ貫	可ゝ貫
同	一	來命一	來命一
同	一	迎水亭	迎水亭
同	一	風投筆	風投筆
二十七	一	一三季吟	一四季吟
二十八	一	ゝ、じ、ま。	ゝ、じ、ま。
同	一	續ゞ	續ゞ
同	一	傳ゝ	傳ゝ
同	一	乃至六十	乃至六十
同	一	玉津島。	玉津島。
同	一	迫ゝ。	迫ゝ。
同	一	真字。	真字。
同	一	日の	日の
同	一	詣行	詣行
同	一	所載	所載
同	一	飛鳥井	飛鳥井
同	一	雅経	雅経
同	一	詣ら。	詣ら。
同	一	參詣	參詣
同	一	詣路の	詣路の
同	一	五日	五日
二十八	一	二ゝ	二ゝ
二十九	一	一ゝ	一ゝ
三十	一	一ゝ	一ゝ
三十一	一	一ゝ	一ゝ
三十二	一	一ゝ	一ゝ
三十三	一	一ゝ	一ゝ
三十四	一	一ゝ	一ゝ
三十五	一	一ゝ	一ゝ
三十六	一	一ゝ	一ゝ
三十七	一	一ゝ	一ゝ
三十八	一	一ゝ	一ゝ
三十九	一	一ゝ	一ゝ
四十	一	一ゝ	一ゝ
四十一	一	一ゝ	一ゝ
四十二	一	一ゝ	一ゝ
四十三	一	一ゝ	一ゝ
四十四	一	一ゝ	一ゝ
四十五	一	一ゝ	一ゝ
四十六	一	一ゝ	一ゝ
四十七	一	一ゝ	一ゝ
四十八	一	一ゝ	一ゝ
四十九	一	一ゝ	一ゝ
五十	一	一ゝ	一ゝ
五十一	一	一ゝ	一ゝ
五十二	一	一ゝ	一ゝ
五十三	一	一ゝ	一ゝ
五十四	一	一ゝ	一ゝ
五十五	一	一ゝ	一ゝ
五十六	一	一ゝ	一ゝ
五十七	一	一ゝ	一ゝ
五十八	一	一ゝ	一ゝ
五十九	一	一ゝ	一ゝ
六十	一	一ゝ	一ゝ
六十一	一	一ゝ	一ゝ
六十二	一	一ゝ	一ゝ
六十三	一	一ゝ	一ゝ
六十四	一	一ゝ	一ゝ
六十五	一	一ゝ	一ゝ
六十六	一	一ゝ	一ゝ
六十七	一	一ゝ	一ゝ
六十八	一	一ゝ	一ゝ
六十九	一	一ゝ	一ゝ
七十	一	一ゝ	一ゝ

日本歴史全書

たらむ後は猶大に振ひて此の類の書を續刊して歴史全書の名を全からしめ、以て本邦歴史の全達をつくり讀者と共にあれを不朽に傳へし

●目次◎第一編日本書紀◎第二編續日本紀上◎第三編同下◎第四編日本後紀◎第五編續日本後紀◎第六編文徳實錄◎國史捨遺◎第七編三代實錄上◎第八編同下◎第九編日本紀略◎第十編本朝世紀◎以上に掲ぐる書目は僅に十種に過ぎざれども本邦の歴史はこれにて完備すといふにはあらず、まづ以上の書目を刊行し

内藤耻叟序文并

日本書

本書は、本朝の正史にして、元明天皇の養老四年、天地開闢より、鶴巣草葺不合尊にいたるまでのことを載せたり、されば、この書は、我國民たらむ者は、故に、苟も、その修むる學問に行はるゝところの刊本數種ありさいへど、その版本は、魯魚の誤謬頗る多く、或は臆測、私意むものおほし、まことに遺憾といふべし、さるる古寫本等も、悉く、これを渉獵し、中に覬き、たり、その考證の精確にして、且周到なること、これ、即ち、この必讀なる書を出版するに民たらむものは、その何人たるをえらばず、一

一手發賣元　東京

新撰長歌集正誤

正	頁	行	誤
くらおかみ	四十四	十二	くらをかみ
かひならし。	九十三	十一	かひならす
追ひねらふ	九十四	四	追ひぬらふ
つくば。	百	二	つくて
家わすれ	同	八	家はすれ
まにまに。	百廿三	一	まにまた
むそのたはれ男	百廿六	七	をそのたはれ男